福岡市

橋本一丁田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第２２０集

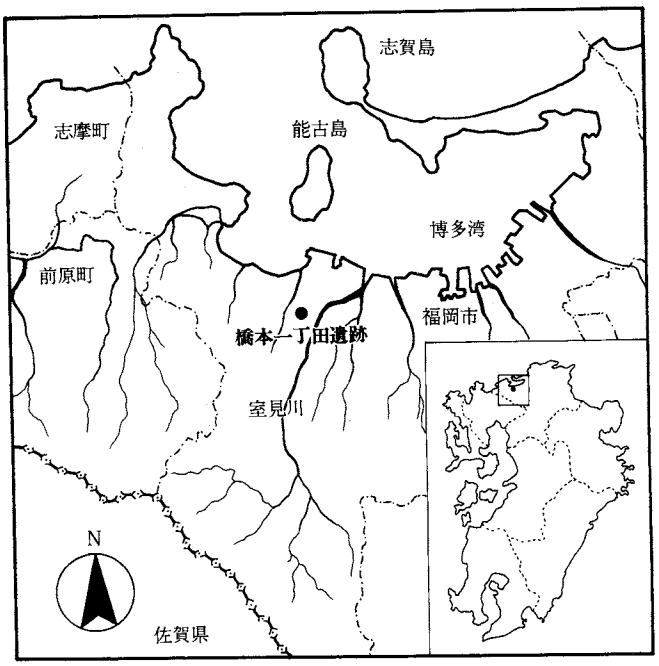
１９９０

福岡市教育委員会

はしもといっちょうだ

橋本一丁田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第２２０集



遺跡略号	ＨＩＴ
調査番号	８８２５

平成２年

福岡市教育委員会

(1)　調査地遠景（南から）

(1)　ＳＤ25（南から）

(2)　ＳＤ25 堰・矢板列（東から）

(1)　第 1 号矢板列（東から）

(2)　第 1 号矢板列（南から）

序

福岡市は地理的関係から、先史時代より東アジアと我が国との文化交流の門戸として、発展を遂げてきました。このような歴史的背景から、市内には各時代の文化財が数多く埋蔵されています。しかしながら、近年の都市の発展に伴う開発によって、我々の祖先が地中に残してきた埋蔵文化財が消滅しつつあります。このため福岡市教育委員会では、遺跡を保存すべく各種開発事業に先立って発掘調査を行い、記録保存によって後世に伝えるように努めています。

今回報告します橋本一丁田遺跡の発掘調査報告書は、市民体育館建設工事に先立って行った発掘調査記録です。この調査では、福岡市西部の沖積平野における弥生時代の灌漑施設に伴う土木技術を明らかにすると共に、社会構造の解明を含む多くの成果を得ることができました。

今後、本報告書および資料が、学術研究だけに留まらず、市民各位の文化財に対する認識を深めるために寄与することを深く願うものです。

最後に、調査に際しては酷暑のなかでご協力いただいた地元の方々をはじめ、関係各位の皆様に心よりお礼申し上げます。

平成２年３月

福岡市教育委員会
教育長　佐藤善郎

例　　言

1．本報告書は、福岡市教育委員会が昭和63年７月12日～同年11月11日において西区拾六町27－２他に所在する橋本一丁田遺跡を発掘調査した記録である。

2．遺跡名は福岡市教育委員会発行の文化財分布地図－西部Ｉ－からによる。

3．発掘調査は、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が行い、同課職員の二宮忠司・瀧本正志が担当した。

4．本書で用いた方位は全て磁北である。この方位は真北より６°21′西偏する。

5．本書の執筆は、第３章３－Ｃを二宮が、その他を瀧本が担当した。

6．編集は二宮と協議を重ね、瀧本が担当した。

7．実測は、遺構を二宮・瀧本・大庭友子・村上かをりが、遺物を二宮・瀧本・大庭・高橋健治がそれぞれ担当した。

8．写真は、遺構撮影を瀧本が、遺物撮影を二宮がそれぞれ担当し、焼き付けを二宮・大庭が担当した。

9．本書では遺構に一連の番号を付し、遺構の種別を表すため下記に示すように遺構を記号化して遺構番号の前に付して表記した。

ＳＡ－柵,　ＳＢ－建物,　ＳＤ－溝・河川,　ＳＫ－土壙

10．本書で報告した発掘調査に係わる遺物・記録類の全ては、福岡市立埋蔵文化財センター（博多区井相田２丁目）に収蔵されているので活用されたい。

遺　跡　名	橋本一丁田遺跡		
遺跡略号	ＨＩＴ	調査番号	８８２５
調　査　地	福岡市西区拾六町27－２他		
調査期間	昭和63年７月12日～昭和63年11月11日		
開発面積	7000㎡	調査面積	2713㎡（延べ8439㎡）

本 文 目 次

頁

第1章 はじめに…… 1

1．発掘調査に至る経過…… 1

2．発掘調査の組織…… 1

3．発掘調査の経過…… 2

第2章 遺跡の位置と歴史的環境…… 3

1．遺跡の位置と立地…… 3

2．遺跡の歴史的環境…… 3

3．地　　質…… 4

第3章 調査の記録…… 7

1．遺跡の概要…… 7

2．土　　層…… 7

3．遺　　構…… 8

a．弥生時代の遺構…… 8

b．古墳時代の遺構……13

4．遺　　物……15

a．土　　器……15

b．石　　器……19

c．木　　材……20

第4章 まとめ…… 25

挿　図　目　次

頁

Fig. 1　遺跡位置図（縮尺1／200,000）…… Ⅵ
Fig. 2　ＳＤ25調査風景 …… 2
Fig. 3　周辺遺跡分布図（縮尺1／50,000）…… 5
Fig. 4　周辺地形図・地質調査地点図（縮尺1／2,500）…… 6
Fig. 5　土柱図 …… 6
Fig. 6　遺構と土層の関係略図 …… 7
Fig. 7　弥生時代遺構配置図（縮尺1／250 ）…… 折込
Fig. 8　ＳＤ25実測図（縮尺１／200）…… 9
Fig. 9　ＳＤ25第１号堰実測図（縮尺1／50）…… 10
Fig.10　ＳＤ25第２号堰実測図（縮尺1／50）…… 11
Fig.11　ＳＤ25第４号堰実測図（縮尺1／50）…… 11
Fig.12　ＳＤ25第１号矢板列実測図（縮尺1／50）…… 12
Fig.13　古墳時代遺構配置図（縮尺1／250 ）…… 折込
Fig.14　掘立柱建物ＳＢ01実測図（縮尺1／80）…… 13
Fig.15　掘立柱建物ＳＢ02実測図（縮尺1／80）…… 13
Fig.16　掘立柱建物ＳＢ03実測図（縮尺1／80）…… 13
Fig.17　ＳＤ25出土土器実測図（縮尺1／3 ）…… 16
Fig.18　ＳＤ00出土土器実測図（縮尺1／4 ）…… 17
Fig.19　包含層出土土器実測図（縮尺1／4 ）…… 18
Fig.20　ＳＤ16・25，包含層出土石器実測図（縮尺3／4 ・1／3 ）…… 21
Fig.21　ＳＤ25出土矢板実測図（縮尺1／12）…… 22

表　目　次

第１表　ＳＤ25出土矢板計測表 …… 23
第２表　出土掲載遺物一覧表 …… 24

図　版　目　次

巻頭図版 1　(1)　調査地遠景（南から）

巻頭図版 2　(1)　ＳＤ25（南から）　(2)　ＳＤ25堰・矢板列（東から）

巻頭図版 3　(1)　第１号矢板列（東から）　(2)　第１号矢板列（南から）

図　版　1　(1)　調査地周辺航空写真（昭和23年頃）

図　版　2　(1)　調査地周辺航空写真（昭和23年頃）

図　版　3　(1)　調査地周辺航空写真（昭和62年頃）

図　版　4　(1)　古墳時代上層遺構（北から）　(2)　ＳＡ01・02・03（北から）

図　版　5　(1)　古墳時代中層遺構（北から）　(2)　ＳＢ01（西から）

図　版　6　(1)　ＳＢ02（西から）　(2)　ＳＢ03（西から）

図　版　7　(1)　ＳＤ22・24（南から）　(2)　ＳＤ24（北から）

図　版　8　(1)　弥生時代上層遺構（北から）　(2)　ＳＤ25（北から）

図　版　9　(1)　ＳＤ25（南から）　(2)　ＳＤ25南半部（東から）

図　版　10　(1)　ＳＤ25第1号矢板列（東から）　(2)　ＳＤ25第１号矢板列（南から）

図　版　11　(1)　ＳＤ25第１号堰（西から）　(2)　ＳＤ25第１号堰（北から）

図　版　12　(1)　ＳＤ25第２号堰（西から）　(2)　ＳＤ25第２号堰（南から）

図　版　13　(1)　ＳＤ25第４号堰（西から）　(2)　ＳＤ25第４号堰（南から）

図　版　14　(1)　弥生時代下層遺構（南から）　(2)　ＳＤ29（北から）

図　版　15　(1)　弥生時代水田面足跡（南から）　(2)　足跡との比較（右足・女性23cm）

図　版　16　(1)　ＳＤ00・25出土遺物

図　版　17　(1)　ＳＤ25・含包層出土遺物

図　版　18　(1)　ＳＤ25出土矢板

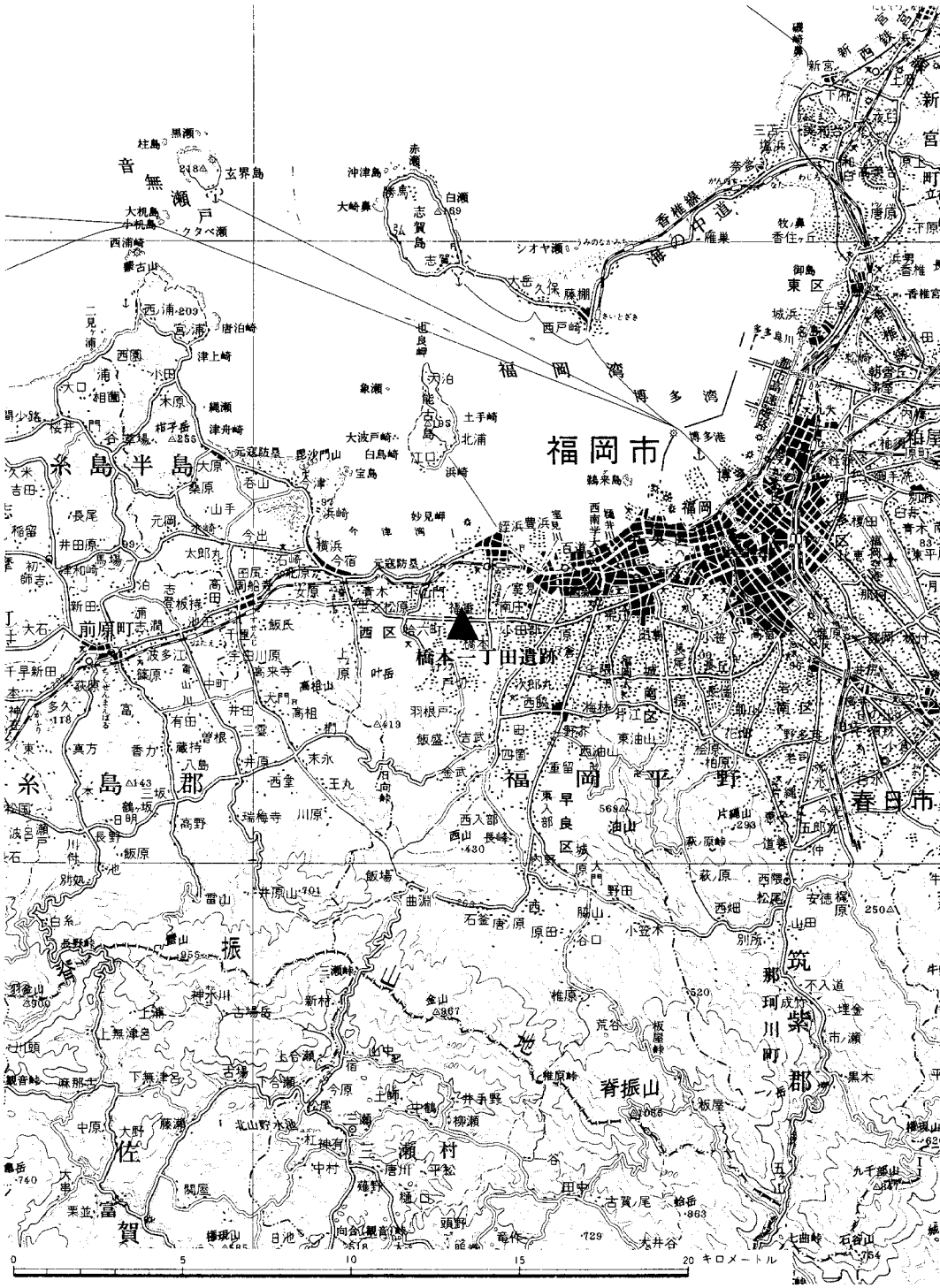


Fig. 1　遺跡位置図（縮尺1/200,000）

第1章　はじめに

1．発掘調査に至る経過

福岡市では、市民が健康で活力に満ちた豊かな生活をおくるために市民スポーツ振興総合計画を策定し、目的、年齢、体力等に応じたきめ細かな施策を進めるとともに、スポーツ・レクレーション施設の充実に努めている。例えば、各行政区を単位にプール・地区体育館の設置を進めている。しかし、昭和57年に現在の7区制へ移行した後の城南区・早良区・西区における地区体育館は未整備の状態であった。このため、市では昭和61年11月西区に体育館を建設することを決定し、昭和62年6月本調査地の同区拾六町27－2・28－2に西体育館を建設することを決めた。その後、事業の主体者である教育委員会社会体育課と用地の取得・造成工事の委託を受けた福岡市土地開発公社とから教育委員会埋蔵文化財課に体育館建設予定地における埋蔵文化財の有無確認の照会がなされた。これを受けた埋蔵文化財課は、予定地が橋本一丁田遺跡の範囲に含まれることから、昭和63年4月27・28日に当該地の試掘調査を行い、弥生時代～古墳時代の遺構・遺物の存在を確認した。試掘調査結果をもとに埋蔵文化財課は社会体育課と協議を行い、体育館建設予定地の発掘調査を行って記録保存をはかることとし、発掘調査は建設予定地の南半部3,000m²を調査対象地として昭和63年7月から4ヶ月の予定で実施することで合意した。

2．発掘調査の組織

調査委託　福岡市土地開発公社

調査主体　福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課

	教育長	佐藤善郎
	文化部長	川崎賢二
	埋蔵文化財課長	柳田純孝
	同　課第1係長	飛高憲雄　　折尾　学（前任）
調査担当	文化財主事	二宮忠司（現文化課主査）
		瀧本正志
事務担当	松延好文，安部　徹，岸田　隆（前任）	
調査補助	大庭友子，村上かをり	
整理補助	高橋健治	

調査協力　有田吉太，伊藤みどり，井口菊太郎，牛尾秋子，牛尾シキヨ，牛尾二三子
牛尾　豊，尾崎達也，尾崎八重，大内文恵，金子ヨシ子，菊地栄子
菊地昭一，倉光ナツ子，小林フミ子，白坂フサヨ，正崎由須子
惣慶トミ子，典略　初，鍋山千鶴子，西島マツ子，西島ミチ子，林　嘉子
平田勇雄，平田千鶴子，平野ミサオ，細川ミサヲ，真名子時雄
真名子ゆきえ，山西人美，結城シズ，結城千賀子，結城信子，結城弥澄
吉岡トク，脇坂武美，脇山喜代子
資料整理　青柳恵子，内山孝子，尾崎京子，斎藤美紀枝，平田ミサ子，藤崎洋子
真名子順子，渡辺ちず子

3．発掘調査の経過

調査は昭和63年７月12日に着手し、約４ヶ月の期間を経て昭和63年11月11日に終了した。調査区の面積は2,713㎡であるが、数層にわたる生活面の調査を行った結果、延べ調査面積は8,439㎡となった。調査は、試掘調査では耕作土下約30㎝において古墳時代初頭の遺構を確認していることを考慮して、耕作土・床土をバックフォーで除去することから始まった。調査の進展にしたがって、古墳時代以降における削平が激しかったこと、試掘調査では住居址の可能性が指摘されていた東南部地区の黒色土が古墳時代前期の包含層であること、さらには調査区の東半部が一時期には川であったことが判明した。最後の調査面は試掘調査では水田の可能性が極めて高いとされていたが、掘り下げてみると畦畔は確認されなかったものの人の足跡が一面に検出された。

Fig．2　ＳＤ25調査風景

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

１．遺跡の位置と立地

橋本一丁田遺跡は、早良平野の北西部、西区拾六町27－２他に所在し、東西185ｍ・南北580ｍを測る楕円形状を呈する。調査地は、図版１に示すように遺跡範囲の中央に位置する。

福岡市の北半部を占める平坦地を一般的に福岡平野と呼んでいるが、地形的には丘陵に画されたいくつかの平野から成っている。この福岡平野の西端部に位置するのが早良平野である。早良平野は、西を背振山・長垂山、東を油山からそれぞれ派生した丘陵によって画された、地形的には独立した沖積平野である。平野の形成は、主に平野中央を北流する室見川およびその水系に属する小河川や平野の西辺を北流する十郎川などの大小の河川による。現況地形からは確認することは出来ないが、早良平野を形成した室見川の流路が古代から現在まで変わることなく連続してきたとは考えられず、流路を変えながら氾濫を繰り返して平野を形成してきたと考えるのが妥当であろう。このため、低地水田の広がる調査地周辺において流路が存在した可能性は高い。平野は、博多湾、すなわち北に向かって緩やかな下り勾配を見せ、調査地付近においても約５′を測る。

調査地は室見川と十郎川との中間に位置し、海岸線から2,500ｍを測る。現況は標高5.7ｍ前後を測る水田で、周辺も沖積平野特有の低位水田が広がっている。

調査地周辺は、図版１・２に見られるように、昭和20年代前半には条里地形を良好な状態で見ることができた。しかし、この20数年の間に調査地周辺は宅地開発が進み、可耕地は大幅な減少を示している。図版２と３とを見比べてみると同一地点とは思えないほど変容していることが理解されよう。以前は調査地から海岸が望めたらしいが、現在では博多湾に浮かぶ能古島の頂部を眺めるにすぎない状態である。

２．遺跡の歴史的環境

本遺跡の位置する早良平野においては、縄文時代から現代に至る人々の生活の跡である遺跡が見られる。遺跡はFig.３に示すように、その多くが早良平野の辺部を馬蹄形状に囲むように点在している。これらの遺跡については、既刊の報告書に詳細に言及しつくされているので本文末に関係文献を列参してこれにゆずり、参照されたい。

本書では、周辺の低地平野に所在する遺跡の内で、本遺跡に関係する弥生時代～古墳時代に属する遺跡に限定して述べるものである。これまでの発掘調査において、早良平野の低地にお

ける発掘調査例は多くはない。これは、調査地周辺が市街化調整区域であることから、都市部に比べて開発の速度が遅いことも一つの要因であろう。

縄文時代末期～弥生時代初頭にかけての遺跡としては、十郎川遺跡・拾六町ツイジ遺跡・中牟田遺跡がある。十郎川遺跡は本調査地から西北600mに位置し、十郎川の東岸に広がる微高地に立地する。この遺跡は調査では明瞭な遺構は確認されていないものの、土壙などからは壺・甕・鉢などの夜臼式土器、石鏃・石斧・石鎌・スクレイパー・石錘などの石器が出土し、遺跡の性格を強く示唆するものである。拾六町ツイジ遺跡は十郎川遺跡の西400mに位置し、低丘陵の端部に立地する。調査では、弥生時代前期初頭・前期後半・後期初頭・5世紀前半にそれぞれ属する土壙・溝などから、壺・甕・鉢などの夜臼式土器、石庖丁・石斧・石錘などの石器、鍬鋤・エブリなどの木器、土師器が出土している。特に、大量の木製農耕具と石錐などの漁具の出土は、各時代における生活基盤の在り方を顕著に示すものである。中牟田遺跡は、本調査地から南西600mに位置し、十郎川の東岸に広がる微高地に立地する。この遺跡でも調査では明瞭な遺構は確認されていないものの、甕・高坏などの夜臼式土器、甕などの土師器が出土している。

弥生時代末から古墳時代初頭に属する遺跡としては、先述した拾六町ツイジ遺跡・中牟田遺跡の他に、野方中原遺跡・湯納遺跡がある。特に野方中原遺跡は環濠を有する大集落で、その出土遺物は新たなる社会体系が構築されいることを強く示すものである。

以上のように、弥生時代末から古墳時代初頭における人々の生活の中心は低丘陵に求められるが、低地平野への本格的進出は明らかではなく、今後に託された大きな課題である。

3．地　　質

当該地における地質調査がFig. 4に示す4ヶ所（No.1～4）で行われている。この調査結果をまとめたのがFig. 5に示した地質柱状図である。以下、この項では地質調査報告書に基づいて述べていく。調査成果によると、調査地周辺の安定した基盤層は一般的に早良岩と呼ばれている花崗岩と風化マサで、地表下10m前後から認められる。この基盤層である早良花崗岩層の上に砂・礫が主な層厚4.5m～5.6mを測る洪積層が堆積し、さらにその上に粘性土・砂質土が主な層厚2.7m～3.3mを測る沖積層が堆積している。洪積層以下では各調査地点においても同様な堆積状況を示しているのに対して、地表下1.7m～3.3mにおける沖積層では堆積状況に顕著な違いを示している。それはFig. 5に示すように、No.1と2では砂・砂礫の堆積が認められるのに対して、No.3と4では粘性土の堆積しか認められない。この現象は、第3章で述べるが、ある時期には調査区の東半部が河川であったとする発掘調査の所見と合致するものである。

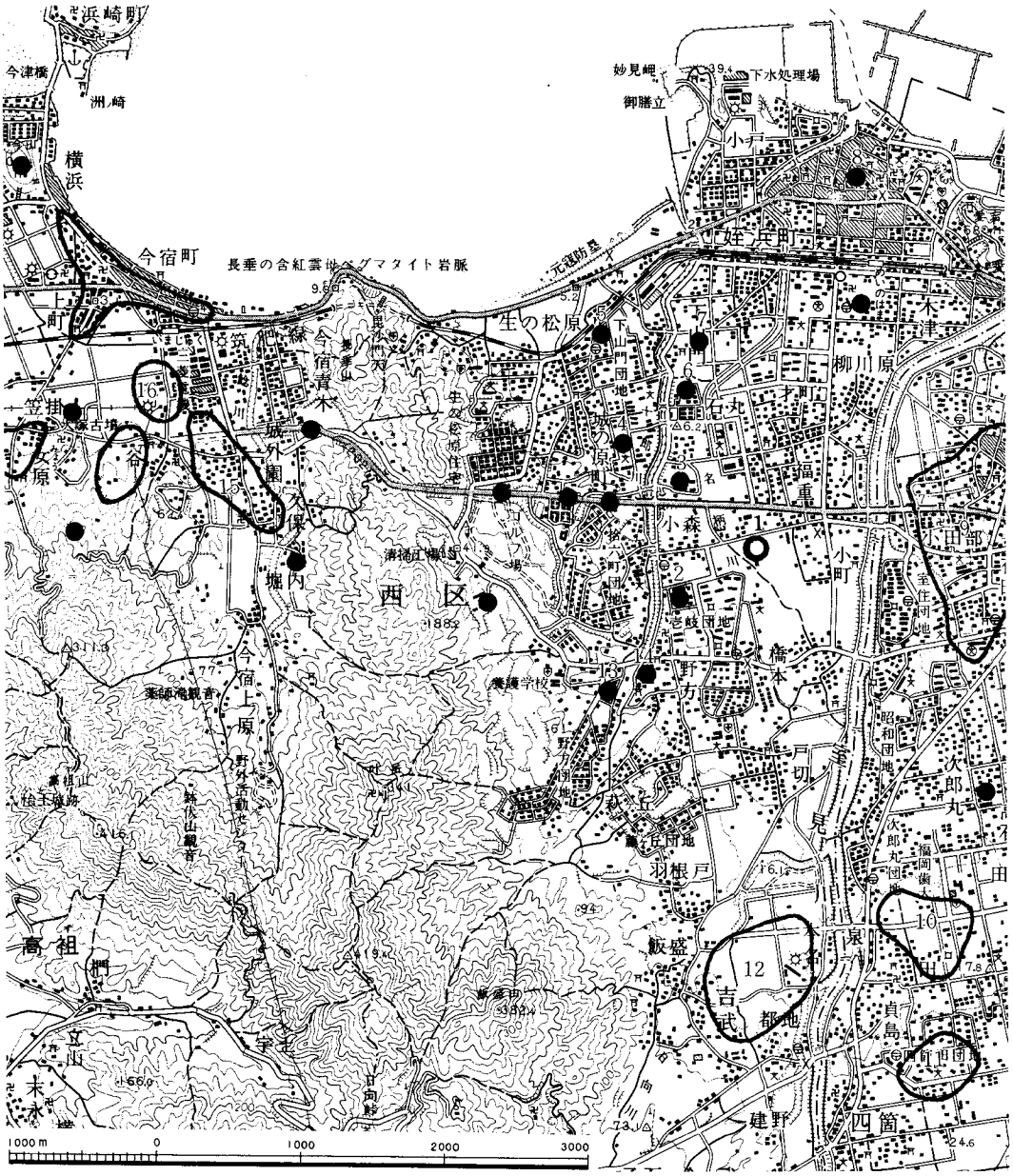


Fig. 3　周辺遺跡分布図（縮尺1／50,000）

1.橋本一丁田遺跡	2.牟多田遺跡	3.十郎川遺跡	4.拾六町ツイジ遺跡
5.下山門遺跡	6.下山門敷町遺跡	7.下山門乙女田遺跡	8.姪浜遺跡
9.有田・小田部遺跡	10.田村遺跡	11.四箇遺跡	12.吉武遺跡
13.野方中原遺跡	14.野方久保遺跡	15.青木遺跡	16.今宿五郎江遺跡

Fig. 4　周辺地形図・地質調査地点図（縮尺1/2,500）

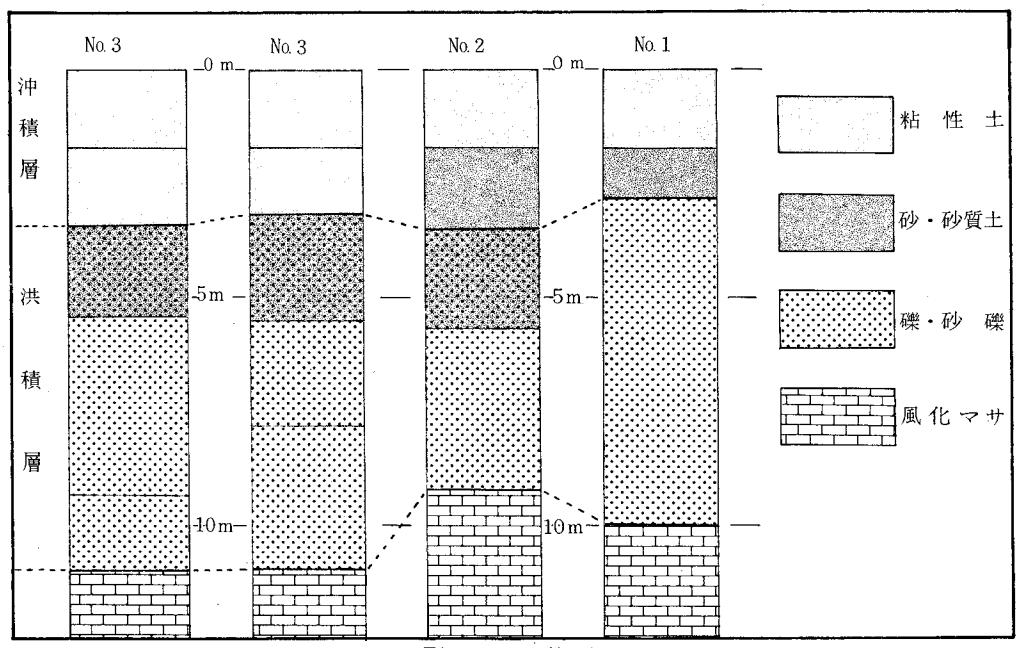


Fig. 5　土柱図

第3章　調査の記録

1．遺跡の概要

橋本一丁田遺跡は、これまでに行った遺物分布調査などから、西区拾六町27－2を中心とする東西185m・南北580mを測る楕円形状の範囲である。過去に同遺跡においての発掘調査は行われておらず、唯一行われた踏査による遺物分布調査などによって得た資料から、弥生時代から古墳時代にかけての集落の存在が推定されるに留まっていた。それゆえに、遺跡の性格も不透明なものがあった。

今回の調査では、弥生時代の溝・水田、古墳時代の溝・掘立柱建物・柵を確認した。全体的には、稲作に伴う灌漑施設が大半を占めていると言えよう。弥生時代の遺構は調査地の西半部にしか遺存していない。これは弥生時代末から古墳時代初頭において河川が調査地の東半部を占める形で流れていたために、それ以前の遺構は削平を受けて消滅しているからであろう。今回の調査は遺跡の性格の一端を知り得ただけで、今後の調査が待たれる。

2．土　層

調査地の基本的層位は、Fig. 6に示すように地表から耕作土、床土層、灰褐色砂質土層、暗灰褐色粘質土～茶灰色粘質砂層、茶灰色粘土層、黒灰色粘土層となっている。遺構検出面のひとつである灰褐色砂質土上面は、調査区西辺部において西方に緩やかな下りを見せる。この緩傾斜面を埋める形で古墳時代初頭の土器を含む黒褐色粘質土が堆積している。このことから、古墳時代初頭の遺跡は微高地上に形成されていたものの、後世に大規模な削平を受けたことがうかがえる。さらに、足跡を検出した茶灰色粘質土層とその上層である茶灰色粘質砂層との間には、面的には大きな広がりを示さないものの、灰色～淡灰色粗砂層が部分的に認められる。このことから、低地における宿命とは言え、数度の氾濫を受けていることは明白である。

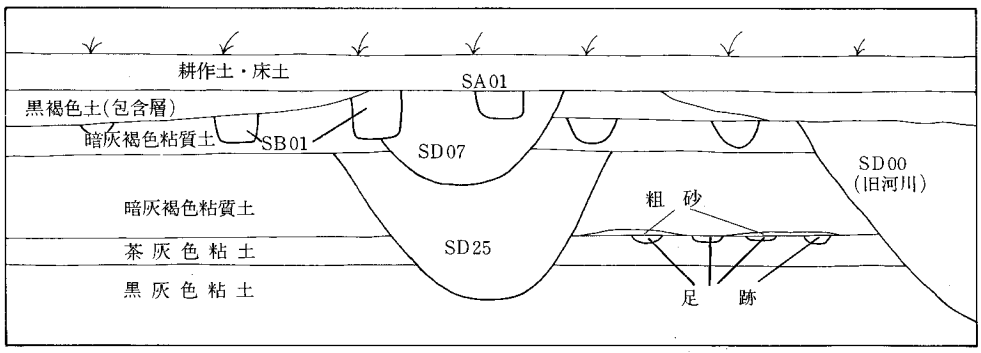


Fig. 6　遺構と土層の関係略図

3．遺　構

弥生時代の遺構は溝・河川４条、水田１面である。古墳時代の遺構は、柵列３条、掘立柱建物３棟、溝23条、土壙２基、小穴である。遺構の時期は大きく、弥生時代中期～後期と古墳時代前期初頭とに分かれる。遺構の性格も、稲作に伴う施設と住居に伴う施設とに分類される。稲作に伴う施設は堰を有するＳＤ25に、住居に伴う施設はＳＢ01～03にそれぞれ代表される。本項では説明の都合上、遺構を弥生時代と古墳時代とに分けて説明するが、遺構の大半は弥生時代と古墳時代との境界に位置する。

a．弥生時代の遺構

弥生時代の遺構は溝・河川４条、水田１面である。

溝・河　川（Fig.7～８，図版７～14）

ＳＤ00　調査区東半部に位置する河川の西岸部。東岸が調査区の外に位置することから、幅員は50ｍ以上の規模が推定される。覆土は黒灰色～白色細砂、粗砂である。覆土からは、弥生土器の甕の破片、土師器の甕・壺などの完形品が出土している。

ＳＤ24　調査区の中央部南辺に位置する素掘りの南北溝。幅1.8ｍ～２ｍ、深さ0.3ｍ～0.4ｍ、長さ15ｍを測る。覆土は白色粗砂。溝の北端はＳＤ00に切られ、南端は調査区の外へ続く。溝の断面形は逆蒲鉾形を呈し、斜面は弧を描くように立ち上がる。

ＳＤ25　調査区の西辺部で検出した。北西方向に直線的に流れる河川である。幅4.3ｍ～５ｍ深さ１ｍ～1.3ｍを測る。断面形は半月状を呈し、斜面は緩やかな弧を描くように立ち上がる。覆土は砂質土・シルト・粗砂が互層になって堆積している。遺物は川底の灰色粗砂層から夜臼式土器・弥生土器・土師器・石器・剥片などがコンテナに１箱ほど出土した。また、川底の４ヶ所では板材・丸太材を用いて川底を横断するよう造られた堰を、西岸斜面では護岸用の矢板列を１ヶ所それぞれ確認した。

ＳＤ27　調査区の北西部に位置する素掘りの南北溝。幅1.8ｍ～２ｍ、深さ0.5ｍ、長さ23ｍを測る。南端部はＳＤ25に切られ、北端部は調査区の外につづく。覆土は上層を暗灰色系砂質土、下層を灰色系粗砂～細砂が堆積している。溝の断面形は逆蒲鉾形を呈し、斜面は弧を描くように立ち上がる。

ＳＤ28　調査区の北西部に位置する素掘りの東西溝。幅1.8ｍ、深さ0.5ｍ、長さ２ｍを測る。西端をＳＤ25に切られ、東端はＳＤ27に合流する。溝の断面形は逆蒲鉾形を呈し、斜面は弧を描くように立ち上がる。

ＳＤ29　調査区の西辺部に位置する素掘りの南北溝。幅0.6ｍ～0.8ｍ、深さ0.1ｍ、長さ33ｍを測る。溝の北端はＳＤ00に切られ、南端は調査区の外につづく。溝の断面形は逆蒲鉾形を呈し、斜面は弧を描くように立ち上がる。

Fig. 7　弥生時代遺構配置図（縮尺1／250）

Fig. 8　ＳＤ25実測図（縮尺1／200）

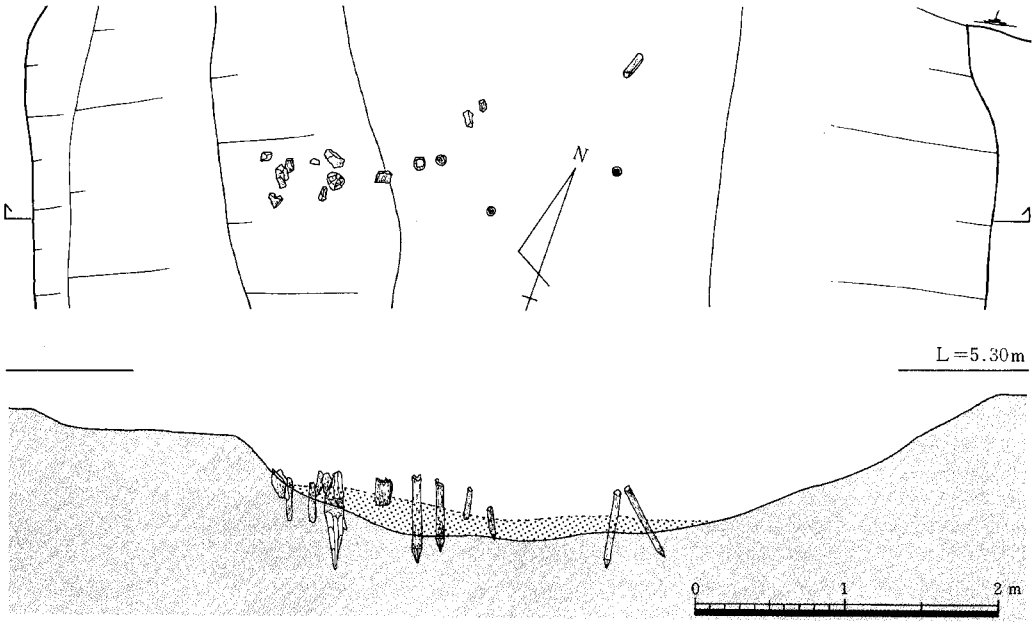


Fig. 9　ＳＤ25第１号堰実測図（縮尺1／50）

堰（Fig. 7 ～11，巻頭図版２・図版11～13）

全てＳＤ25にある。丸太・割り板を用いて築かれている。全般的に遺存状態は悪く、築造時の姿を知ることはできない。

１号堰　４ヶ所の堰の中でもっとも北に位置する。規模は、長さ３ｍ・幅0.6ｍにわたる。用いられている材は、径５cm～13cmの丸太、幅20cmの板材である。丸太は端部を尖頭形に削り、打ち込んでいる。板は割り材で、端部の加工は認められない。直線上に丸太を打ち込み、丸太の間を塞ぐように板を差し込んでいる。

２号堰　１号堰の南７ｍに位置する。規模は、長さ2.5ｍ・幅0.7ｍにわたる。用いられている材は、径５cm～８cmの丸太、幅５cm～15cmの板材である。丸太は端部を尖頭形に削り、打ち込んでいる。板は割り材で、端部の加工は認められない。直線上に丸太を打ち込み、丸太の間を塞ぐように板を差し込んでいる。

３号堰　２号堰の南19ｍに位置する。規模は、長さ１ｍ・幅0.7ｍにわたる。用いられている材は、径５cm～10cmの丸太、幅５cm～10cmの板材である。丸太は端部を尖頭形に削り、打ち込んでいる。板は割り材で、端部の加工は認められない。

４号堰　３号堰の南３ｍに位置する。規模は、長さ1.7ｍ・幅0.5ｍにわたる。用いられている材は、径５cm～10cmの丸太、幅10cm～20cmの板材である。丸太は端部を尖頭形に削り、打ち込んでいる。板は割り材で、端部の加工は認められない。直線上に丸太を打ち込み、丸太の間を塞ぐように板を差し込んでいる。

Fig.10　ＳＤ25第２号堰実測図（縮尺1／50）

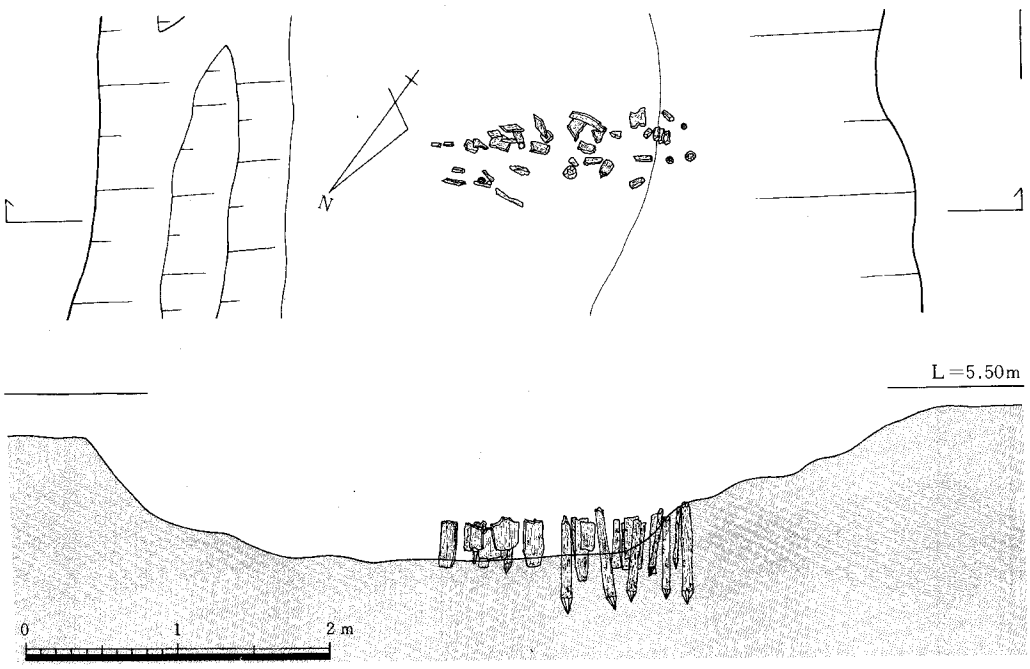


Fig.11　ＳＤ25第４号堰実測図（縮尺1／50）

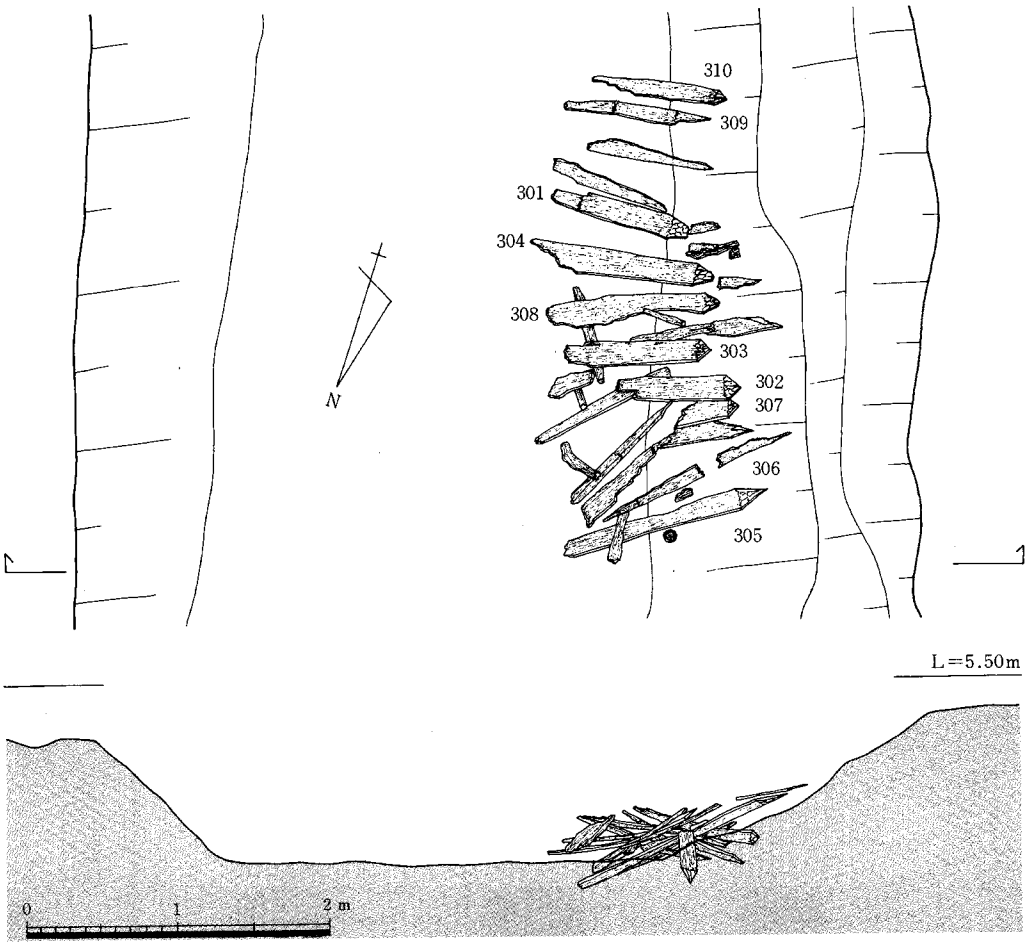


Fig.12　ＳＤ25第１号矢板列実測図（縮尺1／50）

矢　板　列　(Fig.13，巻頭図版３・図版10)

１号矢板列　長さ３ｍ・幅1.5ｍに渡り、川底に倒れた状態で検出した。用いられている材は、幅10cm～20cm・厚さ３cm～５cm・残存長１ｍ～1.5ｍを測る割り板である。板の先端部を尖頭形に削っている。矢板を押さえる丸太などは出土していないことから、板が一部重なり合うようにして直線上に打ち込んだものと考えられる。護岸の修復、もしくは崩壊を防ぐために築いたものであろう。

水　田　(Fig.７，図版15)

ＳＸ01　調査西半部に位置する茶灰色粘質土上面に広がる。標高5.1ｍ前後を測る。水田と直接結び付く畦畔などは検出されなかった。前面には図版15に示すように人の足跡が残り、灰色粗砂が覆う。遺物は出土していない。

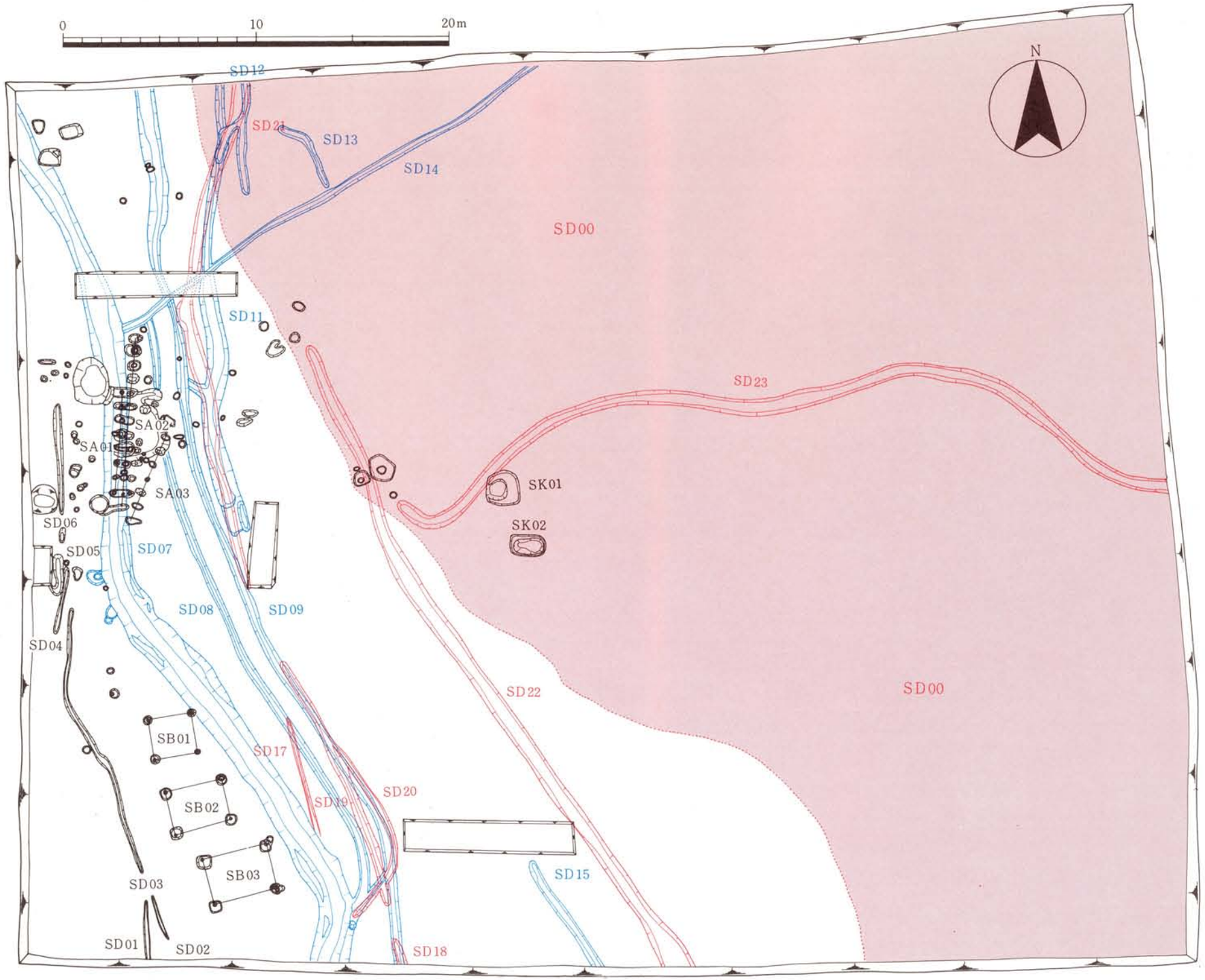


Fig.13　古墳時代遺構配置図（縮尺1／250）

b．古 墳 時 代 の 遺 構

古墳時代の遺構には、柵列３条、掘立柱建物３棟、河川・溝23条、土壙２基、小穴がある。これらの遺構は黒褐色粘質土、灰褐色砂質土層上面で検出した。

掘 立 柱 建 物　(Fig.14～16，図版５～６)

ＳＢ01　調査区南西部に位置する東西棟建物。桁行１間（2.2ｍ）、梁間１間（2.1ｍ）。柱掘形は径35cm～50cm前後を測る円形、もしくは楕円形。切り合い関係から、ＳＢ01はＳＤ07が埋没した後に建てられている。

ＳＢ02　調査区南西部、ＳＢ01の南に位置する東西棟建物。桁行１間（３ｍ）、梁間１間（2.2ｍ～2.3ｍ）。柱掘形は辺55cm前後を測る隅丸方形。

ＳＢ03　調査区南西部、ＳＢ02の南に位置する東西棟建物。桁行１間（3.4ｍ）、梁間１間（2.4ｍ）。柱掘形は辺65cm～75cm前後を測る隅丸方形、もしくは楕円形。東梁間の柱掘形には柱抜き取り痕がある。

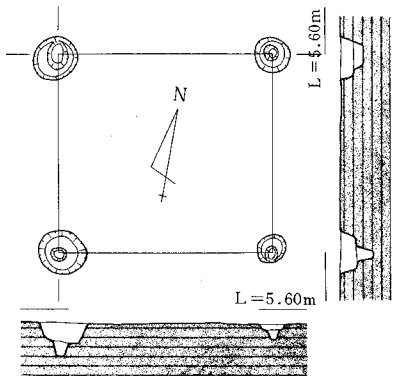


Fig.14　掘立柱建物ＳＢ01実測図（縮尺1/80）

柵　列（Fig.13，図版４）

ＳＡ01　調査区西辺部中央に位置する南北方向の柵である。７間で構成される。柱間は70cm～80cmを測る。柱掘形は、径20cm～40cmを測る円形ないし楕円形。

ＳＡ02　調査区西辺部中央、ＳＡ01の東に位置する南北方向の柵である。12間で構成される。柱間は70cm～80cmを測る。柱掘形は、径40cm前後を測る円形ないしは楕円形。

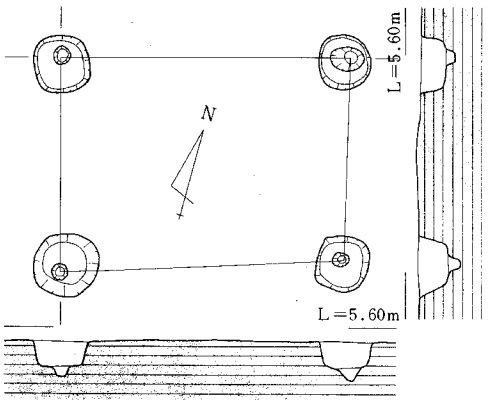


Fig.15　掘立柱建物ＳＢ02実測図（縮尺1／80）

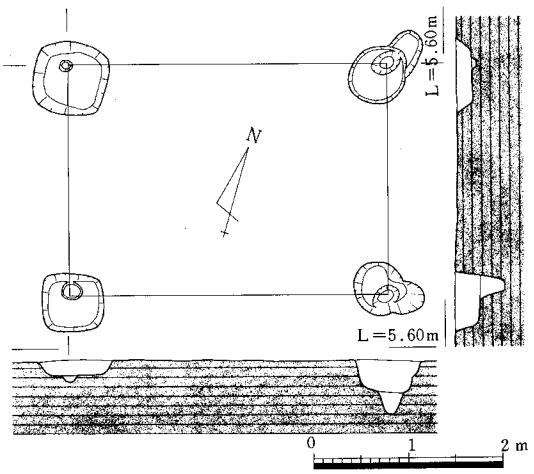


Fig.16　掘立柱建物ＳＢ03実測図（縮尺1／80）

ＳＡ03　調査区西辺部中央、ＳＡ02の東に位置する。柵の方向はＳＡ01・02より東に偏する。７間で構成される。柱間は75cm～80cmを測る。柱掘形は、径30cm～40cmを測る円形ないし楕円形。

溝（Fig.13，図版４～５）

ＳＤ01　調査区南西隅に位置する素掘りの南北溝。幅20cm、深さ13cmを測る。

ＳＤ02・03　調査区南西隅、ＳＤ01の東にある素掘り溝。南南東から北北西方向に流下する。幅15cm、深さ５cmを測る。覆土は黒褐色粘質土。

ＳＤ04・05・06　調査区西辺部に位置する素掘りの南北溝。幅15cm～30cm，深さ５cmを測る。本来はつながり、１条の溝を形成していたと考えられる。覆土は黒褐色粘質土。

ＳＤ07　調査区西辺部にある幅0.9m～1.7m、深さ0.5m～0.7mを測る素掘りの溝である。西北方向に蛇行しながら溝底レベルは北に向かって下降する。溝の断面形は半円形を呈する。覆土は上層を灰色系砂質土、下層を灰色系粘質土・シルトが主体をなす。

ＳＤ08・09　調査区西辺部、ＳＤ07の東に位置する素掘りの南北溝。幅30cm～60cm、深さ５cm～15cmを測る。

ＳＤ11　調査区西北部、ＳＤ09の東に位置する素掘りの南北溝。幅0.4m～1.2m、深さ0.5m～0.7mを測る。

ＳＤ14　調査区西北部に位置し、南西から北東方向に流下する素掘りの溝。幅0.3m～0.4m、深さ0.1mを測る。

ＳＤ15　調査区南辺中央部にあり、南東から北西方向に流下する素掘りの溝。幅40cm～60cm、深さ５cmを測る。

ＳＤ19　調査区南西部に位置し、幅0.2m～0.4m、深さ0.1mを測る素掘りの南北溝。

ＳＤ21　調査区西部中央に位置する素掘りの南北溝。幅0.4m～0.7m、深さ0.1mを測る。

ＳＤ22　調査区中央に位置し、南東から北西方向に流下する素掘りの溝。幅0.6m～1.1m、深さ0.2mを測る。

ＳＤ23　調査区中央にある素掘りの東西溝。幅0.6m～1.8m、深さ0.1mを測る。覆土は白色粗砂。

土　壙（Fig.13，図版４～５）

ＳＫ01　調査区中央部に位置する。隅丸方形状の平面形を呈し、辺1.7m前後、深さ0.5mを測る。覆土からは甕などの土師器片が出土している。

ＳＫ02　調査区中央部、ＳＫ01の南に位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、長辺1.8m、短辺1.1m、深さ0.3mを測る。

4．遺　物

遺物の大半は溝から出土した。時代的には弥生時代から古墳時代に属するものである。内容は土器、石器、木材である。土器・石器の大半は溝からの出土で、他の地点から流れてきたものであろうが、器面の摩滅が軽微なことから、調査地から近距離のところであろう。以下、遺物を土器・石器・木材に分けて記述する。

a．土　器

ＳＤ25出土土器（Fig.17，図版16）

甕形土器（101～111）　夜臼式土器と考えられる一群である。これらの土器は、口縁部における整形技法の異なりから３つに分類される。（A）101・102に見られるように、三角形断面の刻目凸帯が口縁端部にあり、端部上面が下向の斜面を呈するもの。（B）103～107に見られるように、蒲鉾形断面の刻目凸帯が口縁端部にあるもの。（C）108・109に見られるように、蒲鉾形断面の刻目凸帯が口縁端部よりやや下がるもの。101は口縁部の破片である。褐色の色調を呈し、１㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整による。102も口縁部の破片である。灰褐色の色調を呈し、0.5㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。内外面とも調整はナデによる。外面には煤が凸帯まで付着している。103は直線的な口縁部の破片である。茶灰色の色調を呈し、１㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整による。104は端部でやや外反する口縁部の破片である。外面は茶褐色、内面は黒灰色を呈し、0.5㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整による。105は直線的な口縁部の破片である。灰褐色を呈し、僅かに0.5㎜程の長石・石英砂粒を含む。106も直線的な口縁部の破片である。茶灰色の色調を呈し、0.5㎜程の長石・石英砂粒を多く含む他に、0.5㎜程の赤色砂粒を僅かに含み、他の土器の胎土と異なりを見せる。調整技法は、内外面ともナデ調整による。107は直線的な口縁部の破片である。茶灰色の色調を呈し、１㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。調整技法は、内面はナデ調整、外面は不明。108は口縁端部に丸味を持つ破片である。内面は黒灰色、外面は茶灰色を呈し、１㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。内外面ともナデ調整による。109は器面の風化が激しく、調整技法は不明。灰褐色を呈し、0.5㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。110は口縁部の破片で、体部から内彎ぎみにのび、口縁部で外反する。１㎜程の長石・石英砂粒を多く含む他に0.5㎜程の雲母を多く含む。内外面とも灰褐色の色調を呈する。調整技法は、内外面ともナデ調整による。111は体部から内彎ぎみにのび、口縁部で外反する。茶灰色の色調を呈し、0.5㎜程の長石・石英砂粒を多く含む。調整技法は、内外面ともナデ調整による。

壺形土器（121）　胴部から頸部にかけての破片で、夜臼式土器である。肩のはる胴部にやや内傾ぎみに立ち上がる頸部がのびる。胴部径は30㎝。色調は内面が茶灰色、外面が黒灰色を呈する。調整は内外面とも丁寧なヘラ磨きが施されている。ヘラ磨きは、内面と外面の胴部では

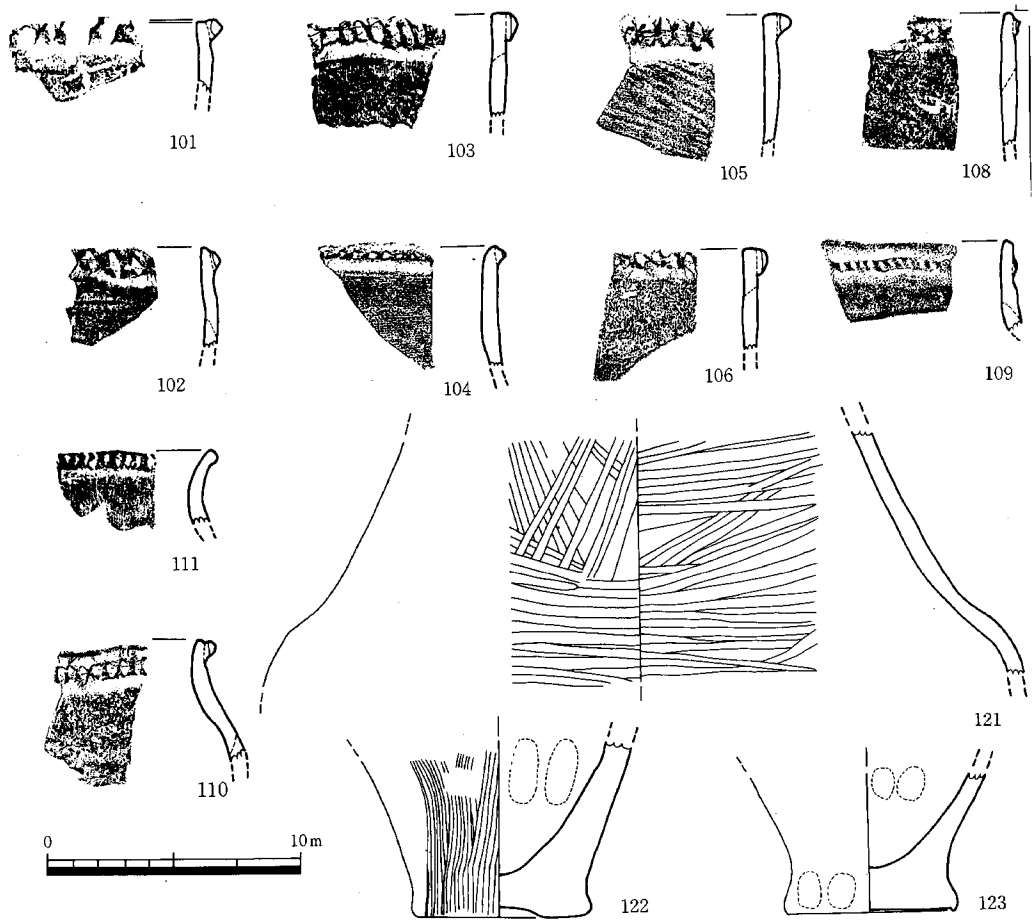


Fig.17　ＳＤ25出土土器実測図（縮尺1／3）

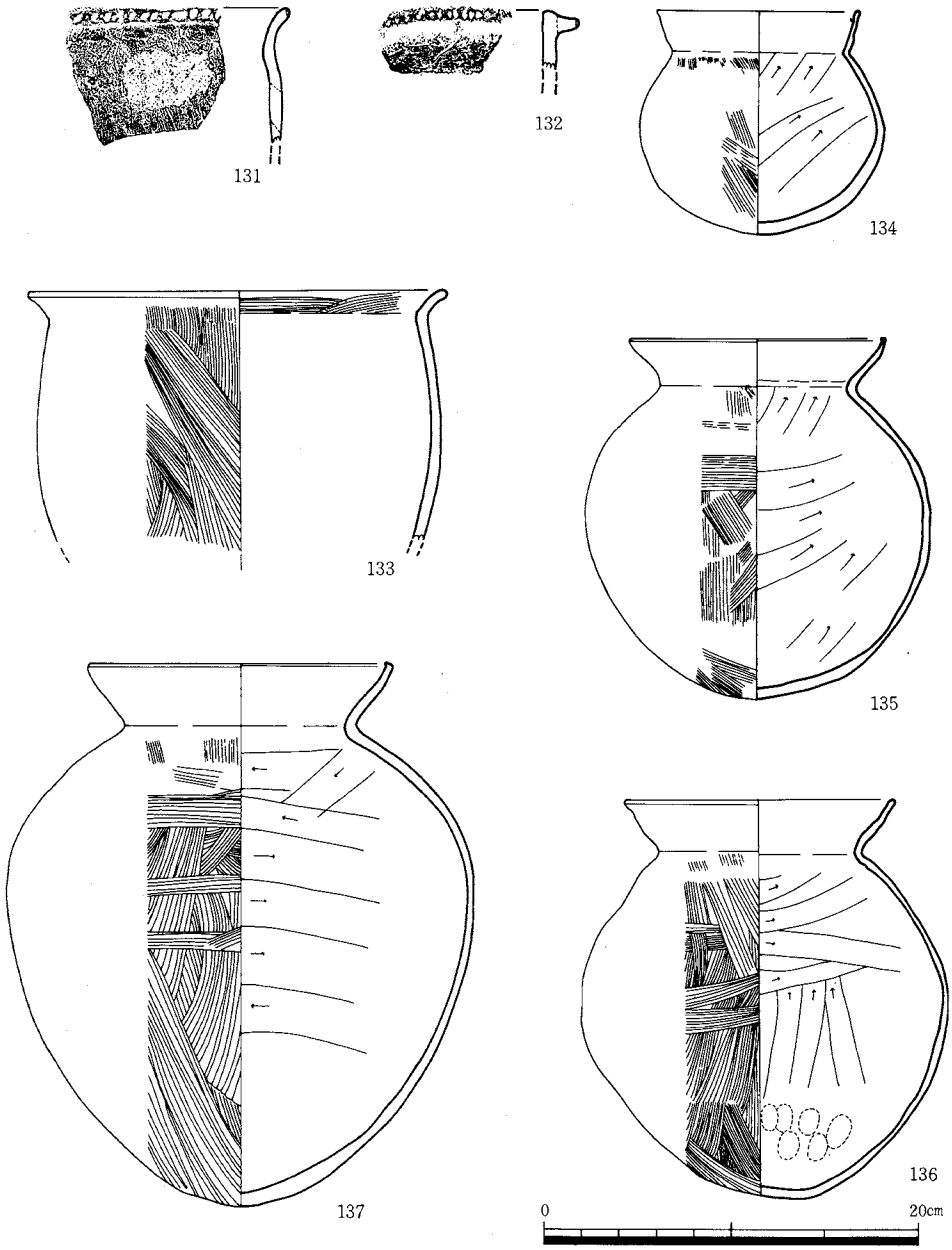


Fig.18　SD00出土土器実測図（縮尺1／4）

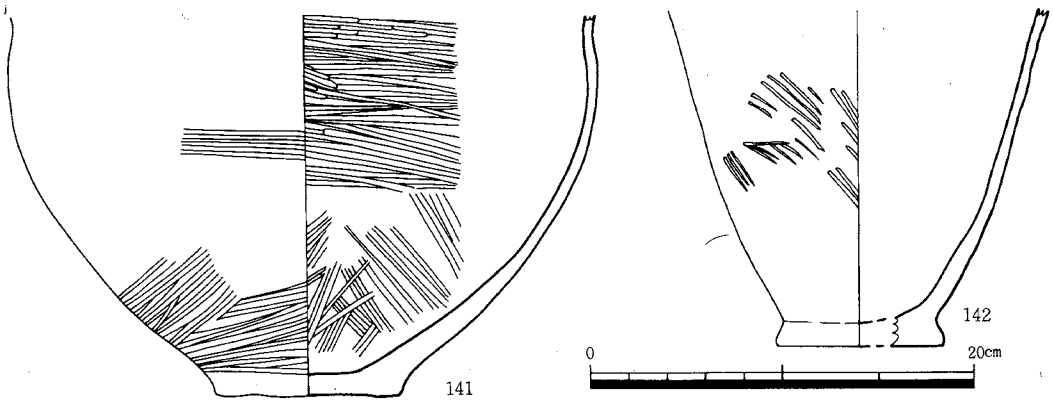


Fig.19　包含層出土土器実測図（縮尺1／4）

横方向が主であるのに対して、頸部外面では縦方向が主である。胎土は1㎜程の長石・石英砂粒を多く含む他に、0.5㎜程の雲母を多く含む。

底　部（122・123）　122の底部径は7㎝。調整技法は、外面が縦方向の刷毛目調整、内面はナデ。茶灰色の色調を呈し、1㎜程の長石・石英砂粒の他に雲母を多く含む。123の底部径は7㎝。調整技法は、内外面ともナデ調整。色調は外面が茶灰色、内面が黒灰色を呈する。胎土は1㎜～3㎜程の長石・石英砂と雲母を多く含む。

ＳＤ00出土土器（Fig.18，図版16）

甕形土器A（131・132）　131はいわゆる如意形口縁を持つ破片である。口縁端部には、棒状工具の押圧による刻み目が施されている。調整技法は、外面が縦方向を主とする刷毛目調整、内面はナデ調整による。色調は内外面とも暗茶褐色。外面全面にわたって煤が厚く付着している。胎土は、1㎜程の長石・石英砂粒、雲母を多く含む。132はやや内傾しながら立ち上がる口縁部の破片である。口縁端部には端部から水平にのびる刻目凸帯を持つ。調整技法は内外面ともナデ調整による。色調は灰褐色を呈し、胎土は1㎜程の長石・石英砂粒、雲母を多く含む。

甕形土器B（133）　体部から内彎ぎみにのび、口縁部で如意形に外反する。口縁端部は面を持つ。復元口径は24㎝。体部外面には全面に厚い煤が口縁部まで付着する。調整技法は、外面が縦方向を主とする刷毛目調整、内面がナデ調整。色調は内外面とも茶褐色。胎土は1㎜程の長石・石英砂粒、雲母を多く含む。

壺形土器（134）　口径11㎝・器高12㎝を測る。体部は球形を呈し、口径は直線的に外反しながら立ち上がる。口縁端部はヨコナデして丸味を持つ。外面と口縁部内面は、刷毛目調整の後にナデを施して仕上げている。体部内面はヘラ削り。色調は赤褐色を呈し、胎土は1㎜程の長

石・石英砂粒と雲母を多く含む。

甕形土器（135～137）　135は口径14cm・器高19cmを測る。体部は球形を呈し、口縁は僅かに内彎しながら「く」の字状に外反する。口縁端部は丸味を持つ。体部外面は刷毛目調整、内面はヘラ削り。口縁部は内外面ともヨコナデを施して仕上げている。色調は内面が黒灰色、外面が灰褐色・黒灰色。胎土は.05mm～１mm程の長石・石英砂粒を多く含む他に、0.5mm程の赤色砂粒を僅かに含む。136は口径15cm・器高21cmを測る。体部は球形を呈し、口縁は僅かに内彎しながら「く」の字状に外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面は主に縦方向の刷毛目調整、、内面はヘラ削り。口縁部は内外面ともヨコナデを施して仕上げている。底部内面には指頭圧痕が残る。色調は体部内面が灰褐色、口縁部内面と外面が灰褐色。胎土は0.5mm～１mm程の長石・石英砂粒の他に微小な雲母を多く含む。137は口径16cm・器高29cmを測る。体部は球形を呈し、口縁は僅かに内彎しながら「く」の字状に外反する。口縁端部は面を持つ。体部外面は主に縦方向の刷毛目調整、内面はヘラ削り。口縁部は内外面ともヨコナデを施して仕上げている。底部内面には指頭圧痕が残る。体部外面には全面に厚い煤が口縁部まで付着する。色調は内外面とも灰褐色。胎土は0.5mm～１mm程の長石・石英砂粒の他に微小な雲母を多く含む。

包含層出土土器（Fig.19，図版17）

壺形土器（141）　暗茶灰色砂質土から出土した壺形土器の口縁部を欠く破片である。内外面ともに丁寧なヘラ磨きが施されている。外面は風化が激しいが一部に丹が残っており、いわゆる丹塗り磨研土器である。胎土は１mm程の長石・石英砂粒を多く含む。

甕形土器（142）　暗茶灰色砂質土から出土した甕形土器の口縁部を欠く破片である。外面は刷毛目調整の後にナデて仕上げている。色調は灰褐色。胎土は１mm程の長石・石英砂粒を多く含む。外面には煤が付着する。

b．石　器（Fig.20，図版17）

201は黒曜石製の三角鏃で灰褐色砂質土層より出土した。断面形はレンズ状を呈する。抉入部は大きな剥離によって造られている。202はサヌカイト製の二等辺三角形を呈する鏃で脚部と先端部とを欠損している。黒褐色粘質土層（含包層）より出土し、風化が著しい。203は灰褐色砂質土層から出土した黒曜石製のつまみ形石器である。縦長剥片の中央部に両側からリタッチを加え、正面からの打撃によって切断している。両側面に細かなリタッチも認められる。打面は平坦打面である。204は203とおなじく灰褐色砂質土層より出土した黒曜石製のサイド・ブレイドである。剥片の末端部を切断し、上下に細かなリタッチを加えて打面と切断面を整えている。両側面には細かな使用痕が認められる。この剥片は上下二方向の剥離方向を持ち、特に正面観

では下方からの剝離が主体を占める。205はＳＤ25より出土した黒曜石製の使用痕のある縦長剝片である。打撃方向を見ると上からの一方向のみで、打面は調整打面である。206も205と同様にＳＤ25からの出土である。黒曜石の剝片であるが、正面の剝離を見ると石核の側面再生剝片と考えられる。正面観の剝離方向は三方向あり、打撃が中央部からも認められる。自然面を有し、打面は平坦打面である。207もＳＤ25からの出土である。自然面を有し、横長に剝離された剝片で、側辺部に使用痕跡のある黒曜石製の剝片である。剝離方向も二方向で、風化が著しい。208もＳＤ25から出土の小型石核で、打面は平坦な面で上から一方向のみの剝離技術を有する。側面・背面は自然面で側辺調整を行わずに一方向からだけの剝離を示す黒曜石製の風化の著しい石核である。209はいわゆる立岩型と考えられる輝緑疑灰岩製の石庖丁で、ＳＤ09の覆土である茶灰色砂質土から出土した。復元すると長さ14cm以上のもので、全面に丁寧な研磨を施している。穿孔は右側からが主体でやや斜めから穿孔している。210はＳＤ25から出土した大型の安山岩製の剝片であるが、加工途中のものと考えられる。形状から小型打製石斧の未製品と思われる。正面・背面とも上からの剝離を主体として剝取している。正面からの剝離は上下二方向から行われている。211はＳＤ16出土の安山岩製の磨石（凹石）である。全面が丁寧に磨かれ、両面中央部が凹む。叩き石とも考えたが側面に打烈痕が認められないことから磨石（凹石）としておく。212は211と異なり凹面は１ヶ所だけで、その部分がかなりの凹凸を示す。211ほどではないが部分的に擦られている。ＳＤ25出土の玄武岩製の凹石である。213はＳＤ25から出土した花崗岩製の石皿である。全面に研磨状態が認められる。火を受けた痕跡が顕著に認められ、剝離した面はその時のものと考えられる。残存する形状から考えると本来は楕円形を呈していたと考えられる。円形であったとすれば、直径は36cm程度のものが復元される。研磨の状態からかなりの使用頻度が考えられ、211・212の磨石とセットで使用された可能性が高い。形状から考えて中央部が窪み、台石状の石皿であろう。214はＳＤ25の底部に堆積していた粗砂層から出土した硬質砂岩製の砥石である。全面が砥石面となり、両面が窪む形状を呈するが、上面より下面のほうがかなりの反りを持ち、使用頻度の著しかったことを物語っている。

c．木　材（Fig.21，図版18）

矢　板（301～304）　301は最大幅15cm・最大厚さ3.5cm・残存長81cmを測る柾目取りした割り板である。断面形は二等辺三角形を呈している。これは、木取りを行う際に、先ず丸太材を縦に二分割してから、小口に割ったためであろう。両面とも調整していない。板先は尖らしている。斧のようなもので加工したものと考えられ、削り痕が明瞭に残る。302は最大幅16cm・最大厚さ４cm・残存長68cmを測る柾目取りした割り板である。断面形は二等辺三角形を呈している。これも、木取りを行う際に、先ず丸太材を縦に二分割してから、小口に割ったためであ

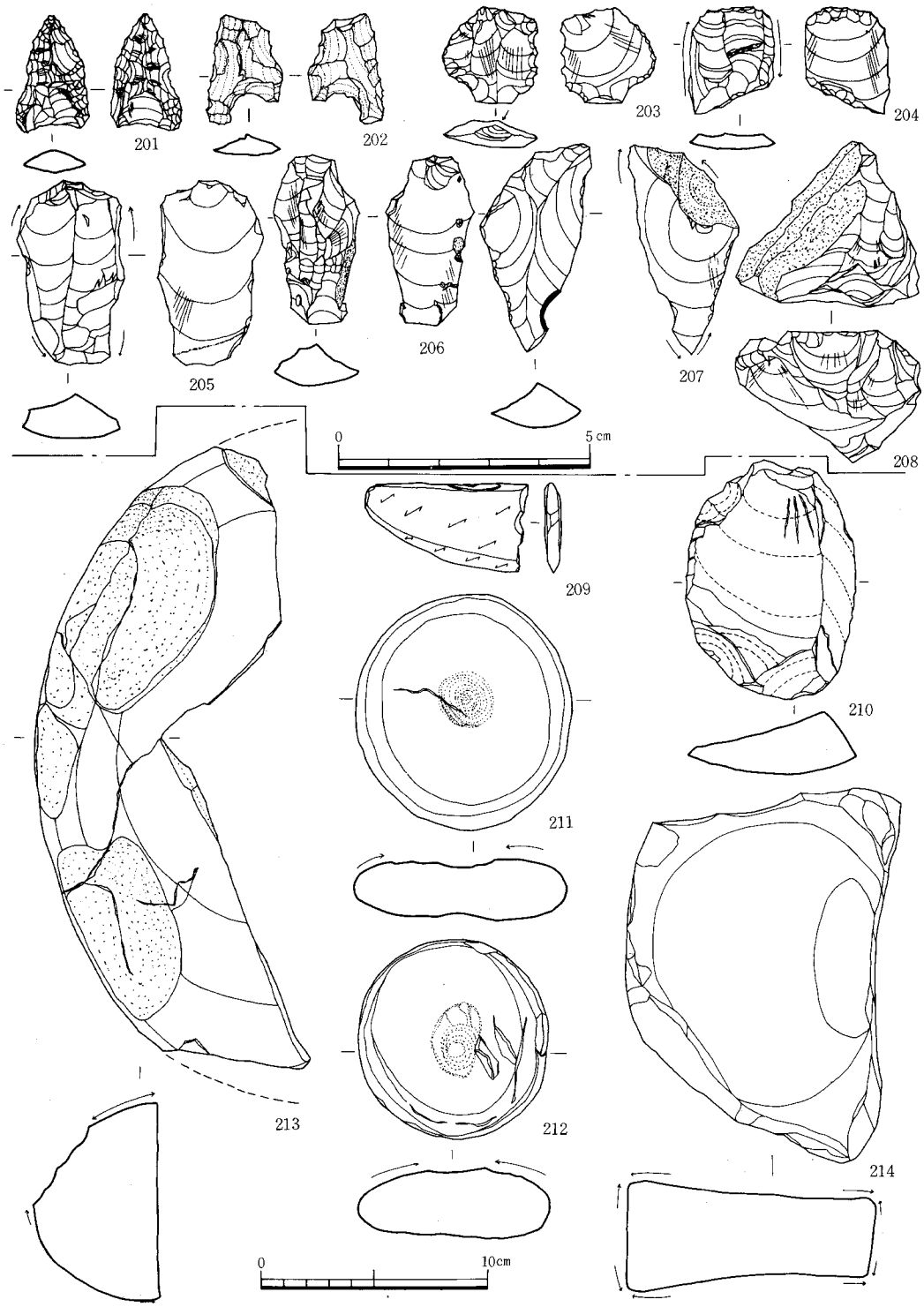


Fig.20　ＳＤ16・25，包含層出土石器実測図（縮尺3／4・1／3）

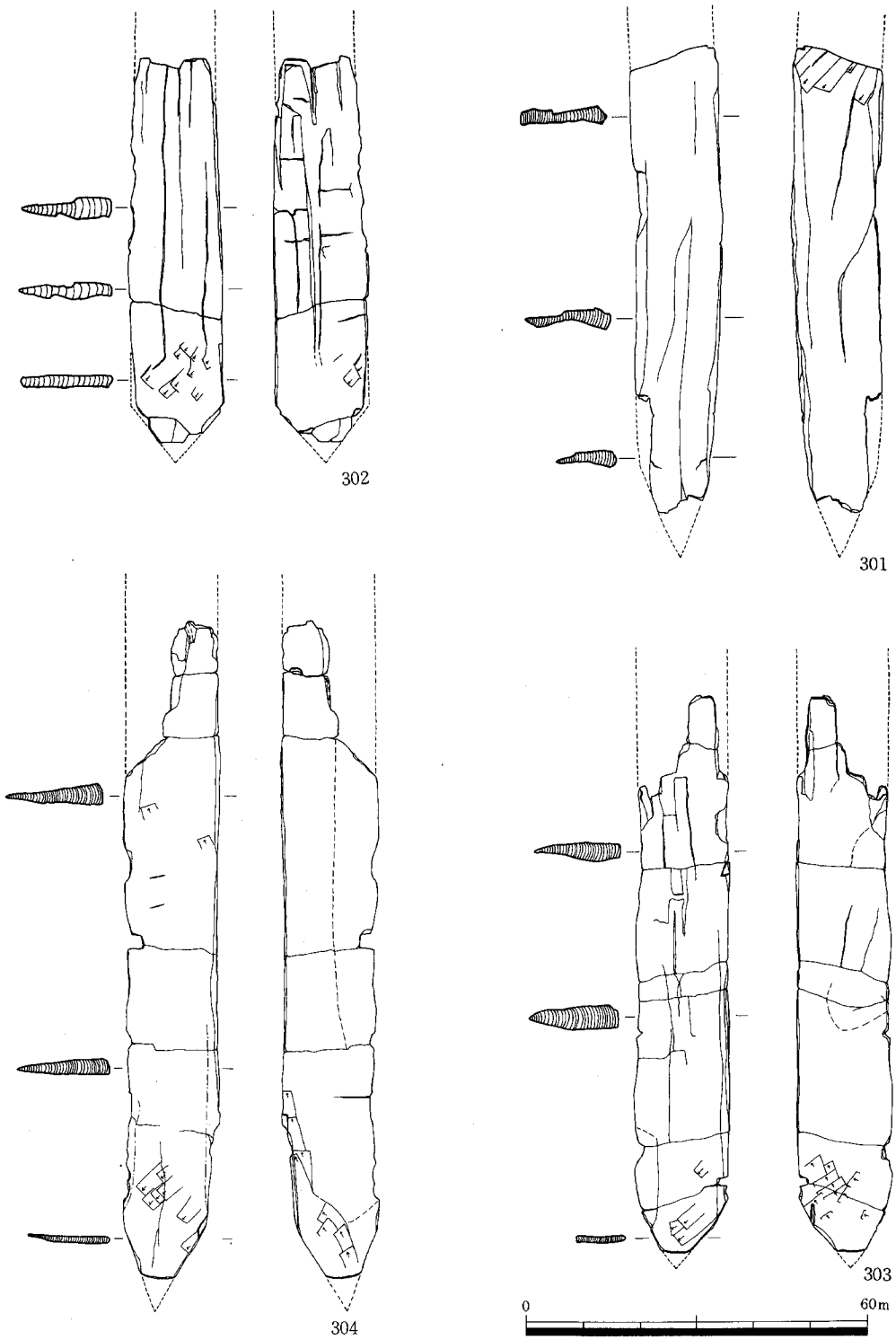


Fig.21　ＳＤ25出土矢板実測図（縮尺1／12）

ろう。両面とも調整していない。板先は尖らしている。斧のようなもので加工したものと考えられ、削り痕が明瞭に残る。303は最大幅17cm・最大厚さ4cm・残存長98cmを測る柾目取りした割り板である。断面形は二等辺三角形を呈している。これは、木取りの方法は301・302と同じくする。両面とも調整していない。板先は斧のようなもので加工して尖らしているが、先端部は欠損している。削り痕が明瞭に残る。304は最大幅17cm・最大厚さ4cm・残存長115cmを測る柾目取りした割り板である。断面形は二等辺三角形を呈している。これも、木取りを行う際に、先ず丸太材を縦に二分割してから、小口に割ったためであろう。両面とも調整していない。板先は斧のようなもので加工して尖らせている。削り痕が明瞭に残る。

矢板No.	残存長(cm)	巾 (cm)	厚さ(cm)	備考
301	81	16	3.5	割板
302	68	16	4	割板
303	98	17	4	割板
304	115	17	4	割板
305	157	15	7	割板
306	122	11	4	割板
307	52	11	2	割板
308	112	16	4	割板
309	97	10	3	割板
310	94	12	2.4	割板

第1表　ＳＤ25出土矢板計測表

遺物番号	出土地点	種　　類	特　　徴	挿　図	図　版
101	ＳＤ　25	甕	口縁Ａ型	Fig.17	図版16
102	ＳＤ　25	甕	口縁Ａ型	Fig.17	図版16
103	ＳＤ　25	甕	口縁Ｂ型	Fig.17	図版16
104	ＳＤ　25	甕	口縁Ｂ型	Fig.17	―――
105	ＳＤ　25	甕	口縁Ｂ型	Fig.17	図版16
106	ＳＤ　25	甕	口縁Ｂ型	Fig.17	―――
107	ＳＤ　25	甕	口縁Ｂ型	Fig.17	図版16
108	ＳＤ　25	甕	口縁Ｃ型	Fig.17	―――
109	ＳＤ　25	甕	口縁Ｃ型	Fig.17	―――
110	ＳＤ　25	甕		Fig.17	図版16
111	ＳＤ　25	甕		Fig.17	図版16
121	ＳＤ　25	壺		Fig.17	―――
122	ＳＤ　25	甕		Fig.17	図版16
123	ＳＤ　25	甕		Fig.17	―――
131	ＳＤ　00	甕		Fig.18	図版16
132	ＳＤ　00	甕		Fig.18	図版16
133	ＳＤ　00	甕		Fig.18	図版16
134	ＳＤ　00	壺		Fig.18	図版16
135	ＳＤ　00	甕		Fig.18	図版16
136	ＳＤ　00	甕		Fig.18	図版16
141	暗茶灰色砂質土	壺		Fig.19	図版17
142	暗茶褐色砂質土	甕		Fig.19	図版17
201	灰褐色砂質土	石　　鏃	黒　曜　石	Fig.20	図版17
202	黒褐色粘質土	石　　鏃	サヌカイト	Fig.20	図版17
203	灰褐色砂質土	つまみ形石器	黒　曜　石	Fig.20	図版17
204	灰褐色砂質土	サイド・ブレード	黒　曜　石	Fig.20	図版17
205	ＳＤ　25	縦長剥片	黒　曜　石	Fig.20	図版17
206	ＳＤ　25	剥　　片	黒　曜　石	Fig.20	図版17
207	ＳＤ　25	剥　　片	黒　曜　石	Fig.20	図版17
208	ＳＤ　25	小型石核	黒　曜　石	Fig.20	図版17
209	ＳＤ　09	石　庖　丁	輝緑疑灰岩	Fig.20	図版17
210	ＳＤ　25	石斧未製品	安　山　岩	Fig.20	図版17
211	ＳＤ　16	磨石（凹石）	安　山　岩	Fig.20	図版17
212	ＳＤ　25	磨石（凹石）	玄　武　岩	Fig.20	図版17
213	ＳＤ　25	石　　皿	花　崗　岩	Fig.20	図版17
214	ＳＤ　25	砥　　石	硬質砂岩	Fig.20	図版17
301	ＳＤ　25	矢　　板	割　　板	Fig.21	―――
302	ＳＤ　25	矢　　板	割　　板	Fig.21	図版18
303	ＳＤ　25	矢　　板	割　　板	Fig.21	図版18
304	ＳＤ　25	矢　　板	割　　板	Fig.21	図版18

第２表　出土掲載遺物一覧表

第4章　ま　と　め

今回の調査は、早良平野の低地に位置する遺跡の調査であった。これまで踏査などによって推定されてきた遺跡が、調査によって確実に存在することが実証されたことは、これまでの方法が間違いではなかったことを示すものである。

本調査では弥生時代から古墳時代に属する遺構、遺物を確認した。以下、本章ではこれまでに述べてきたことをいくつかの項目ごとにまとめてみることにする。

遺構の年代　調査で検出した遺構の年代は大きく、弥生時代で2群、古墳時代で3群にまとまる。弥生時代の2群は、一つが弥生時代中期から後期前半、他の一つが弥生時代後期後半に考えている。弥生時代中期から後期前半の遺構としては、水田・ＳＤ29が該当する。水田は、畦畔などの遺構の存在、および花粉分析によって裏打ちされたものではないが、水田が展開していた可能性は高いと言えよう。弥生時代後期後半に位置する遺構はＳＤ25を中心とする溝群である。ＳＤ25の覆土からは、夜臼式土器をはじめ、弥生時代前期の土器・石器がコンテナに1箱ほど出土している。その中には数点の弥生時代後期後半に属する甕形土器が出土している。さらにこの溝を覆う含包層が古墳時代前期初頭に比定される土器だけを含んでいることから、ＳＤ25の年代が必然的に弥生時代後期後半に求められよう。古墳時代の遺構の年代は、3群の遺構とも前期初頭に位置する。この根拠としたのは、3群の中で最も新しい時期に属する遺構はＳＡ01～03の柵列、ＳＢ01～03の掘立柱建物などであるが、これらの遺構を覆って古墳時代前期初頭に比定される土器だけを含んだ含包層があることによる。以上のことから、本調査で検出した遺構の大半は弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の時間的に狭い範囲に位置するものと考えられる。河川のＳＤ00は遺構の切り合い関係から弥生時代後期末～古墳時代前期初頭に属する。

遺構の性格　調査で検出した遺構は、水田・溝・河川・掘立柱建物・柵・土壙・小穴である。これらの中で性格が明瞭なのは、溝のＳＤ25である。溝内では、維持管理が行われていたこを明示する矢板列、引水のための堰が認められる。このことからＳＤ25は溝の周辺に展開していたと考えられる水田の基幹水路であったと考えるのが妥当であろう。ＳＤ07においても同様と考えられる。その他の幅0.4m未満の溝の性格は決めうる根拠を欠くが、その多くは前者に近いものであろう。3棟の掘立柱建物は、全て1間×1間の規模で、棟筋が並び立っている。3棟の建物は同時期、もしくは時間的に大きな隔たりが無い中で築造されている。これらの建物が

集落を構成する一部なのかの判断は、ここでは避けたい。それは、調査地が削平を受けていること、遺構が本調査地から西に広がっていることから周辺の調査を待って再検討するべきと考えるからである。ＳＤ00は調査地の東を流れる室見川の弥生時代後期末～古墳時代前期初頭における姿であろう。調査地西辺部に堆積し、古墳時代前期初頭の遺物を包含する黒褐色粘質土層の存在は、古墳時代前期遺構における調査地周辺地域が削平、堆積を繰り返しながら現在の地形に至ったことを示すとともに、その時期に属する遺構は確認されなかったものの、調査地および周辺地域において集落の存在を強く示唆するものである。

遺跡の変遷　先に述べたように、本調査地は東半部が室見川によって削平を受け、弥生時代の姿をそのまま残してはいない。そのために推定せざるをえない。調査地周辺では、遅くとも弥生時代中期後半には水田が開かれている。水田の形態がいかなるものであったかは不明であるが、規則性をもって区画されたものではないと考えられる。中期後半～後期にかけては、幾度もの洪水が発生し、水田を土砂が覆っている。弥生時代後期後半頃には灌漑用水路を有し、水路の周辺には水田が広がっていたと考えられる。弥生時代後期後半～古墳時代前期初頭の頃の調査地は、東半部に幅50ｍ以上の室見川が流れ、これまでとは様相を異にする。室見川の流路が東に移動した後も大規模な洪水が発生して、泥砂が周辺を埋没させている。幾度もの洪水を受けながらも、人々は周辺の微高地上に集落を営んでいる。

今後の問題点　今回の調査では橋本一丁田遺跡の一端を知り得たにすぎない。古墳時代前期初頭には集落が調査地周辺において営まれていることは確実であるが、その中心は本調査地から西および南西部に求めることができよう。今後の周辺地域における調査を待ちたい。今回の調査結果は、踏査による調査結果に基づいて設定した遺跡の存在を実証したことになり、踏査による調査方法が間違いではないことも実証した。しかし、踏査による限界もある。遺跡の広がりを確実に知ることは不可能である。今回の調査でも、これまで設定していた遺跡の範囲より東西に遺跡範囲が広がることが明らかとなった。それゆえに、これまで低地平野における遺跡の未発見が心配される。また、早良平野には条里地形を今に残す地域が多いものの、現況に至る変遷を含め不明な点が多い。

橋本一丁田遺跡　周辺主要調査遺跡報告書

福岡市教育委員会　「広石古墳群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集　1977年

福岡市教育委員会　「広石古墳群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第195集　1989年

福岡市教育委員会　「広石南古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第214集　1989年

福岡市教育委員会　「福岡市野方中原遺跡調査概報」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第30集　1974年

福岡市教育委員会　「野方中原遺跡の遺物(1)－Ａ溝出土の土器－」　福岡市立歴史資料館研究報告書第２集　1978年

福岡市教育委員会　「羽根戸遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集　1986年

福岡市教育委員会　「羽根戸遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第180集　1988年

福岡市教育委員会　「羽根戸古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第198集　1989年

福岡市教育委員会　「牟多田遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集　1974年

福岡県労働者住宅生活協同組合　「宮の前遺跡Ａ～Ｄ地点」　1971年

福岡市教育委員会　「宮の前遺跡Ｆ地点」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第13集　1971年

福岡市教育委員会　「下山門遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集　1973年

福岡市教育委員会　「下山門乙女田遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第170集　1987年

福岡市教育委員会　「金武古墳群発掘調査報告」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第15集　1971年

福岡市教育委員会　「福岡市影塚１号墳発掘調査報告」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第21集　1971年

福岡市教育委員会　「徳永アラタ古墳群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第56集　1980年

福岡市教育委員会　「重要遺跡確認調査報告書Ｉ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第68集　1981年

福岡市教育委員会　「重留Ｃ群第１号墳」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第97集　1983年

福岡市教育委員会　「重留遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第178集　1988年

福岡市教育委員会　「有田七田前遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集　1983年

福岡市教育委員会　「有田周辺遺跡調査概報」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第43集　1977年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第１集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第58集　1980年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第２集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第81集　1982年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第３集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第84集　1982年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第４集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第96集　1983年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第５集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第110集　1984年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第６集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集　1985年

福岡市教育委員会　「有田遺跡群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第129集　1986年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第７集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集　1986年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第８集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集　1987年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第９集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集　1988年

福岡市教育委員会　「有田・小田部第10集」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集　1989年

福岡市教育委員会　「福岡市西部地区埋蔵文化財調査報告書」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第64集　1981年

福岡市教育委員会　「田村遺跡Ｉ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第89集　1982年

福岡市教育委員会　「田村遺跡Ⅱ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集　1984年
福岡市教育委員会　「田村遺跡Ⅲ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集　1987年
福岡市教育委員会　「田村遺跡Ⅳ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第168集　1987年
福岡市教育委員会　「田村遺跡Ⅴ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集　1988年
福岡市教育委員会　「田村遺跡Ⅵ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集　1989年
福岡市教育委員会　「拾六町ツイジ遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集　1983年
福岡市教育委員会　「次郎丸高石遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集　1981年
福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書(1)」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集　1977年
福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書(2)」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集　1978年
福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書(3)」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第51集　1980年
福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書(4)」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集　1981年
福岡市教育委員会　「四箇周辺遺跡調査報告書(5)」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第100集　1983年
福岡市教育委員会　「四箇遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第172集　1987年
福岡市教育委員会　「四箇遺跡群」　第23次調査報告書福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集　1989年
福岡市教育委員会　「四箇遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第199集　1989年
福岡市教育委員会　「吉武塚原古墳群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第54集　1980年
福岡市教育委員会　「吉武遺跡群Ⅰ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第127集　1986年
福岡市教育委員会　「吉武高木－弥生時代埋葬遺跡の調査概要－」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第143集　1986年
福岡市教育委員会　「吉武遺跡群」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第187集　1988年
福岡市教育委員会　「吉武遺跡群Ⅳ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第194集　1989年
福岡市教育委員会　「今山遺跡(1)」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第22集　1973年
福岡市教育委員会　「今山・今宿遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第75集　1981年
福岡市教育委員会　「今宿五郎江遺跡Ⅰ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第132集　1986年
福岡市教育委員会　「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）－藤崎遺跡－」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第62集　1981年
福岡市教育委員会　「藤崎遺跡」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集　1982年
福岡市教育委員会　「藤崎遺跡Ⅲ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集　1986年
福岡市教育委員会　「藤崎遺跡Ⅳ」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第138集　1986年
福岡市教育委員会　「県道大野二丈線関係埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）」　福岡市埋蔵文化財調査報告書第52集　1980年
福岡県教育委員会　「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第１集」　1970年
福岡県教育委員会　「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第３集」　1973年
福岡県教育委員会　「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第４集」　1976年

図　　版

妊浜遺跡
五島山古墳群
下山門遺跡
下山門乙女田遺跡
下山門敷町遺跡
域ノ原遺跡
十郎川遺跡
拾六町ツイジ遺跡
有田・小田部遺跡
拾六町亀田遺跡
牟多田遺跡
調査地
橋本一丁田遺跡
橋本辻遺跡

(1) 調査地周辺航空写真（昭和23年頃）

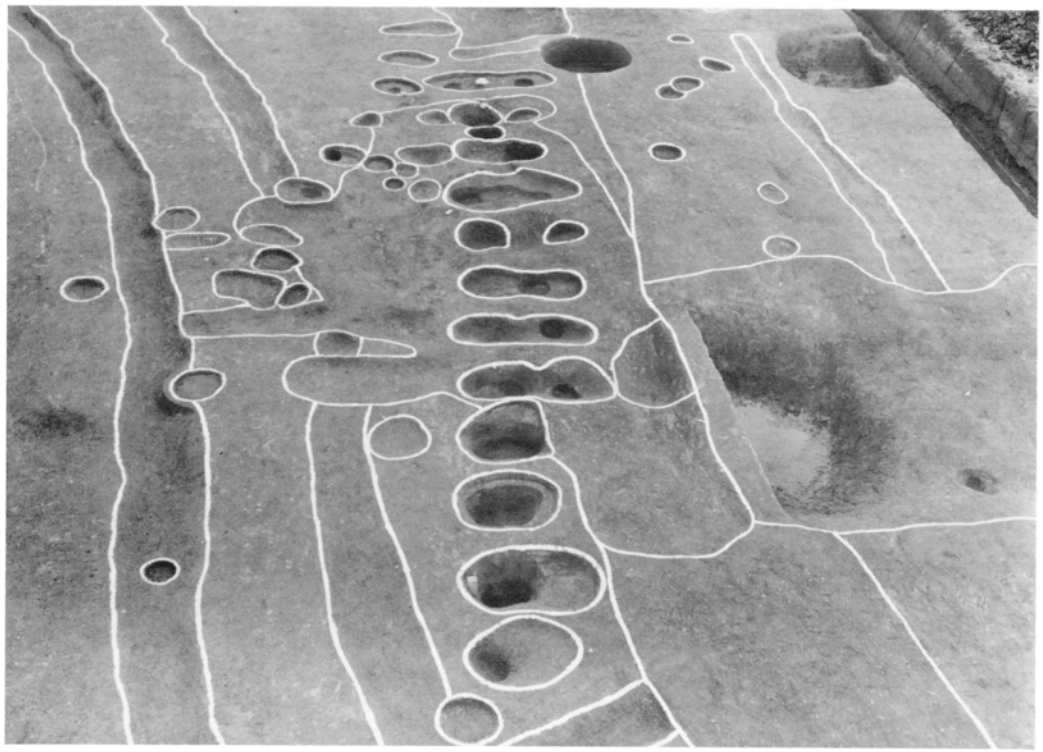
図版 2

(1) 調査地周辺航空写真（昭和23年頃）

(1) 調査地周辺航空写真（昭和62年頃）

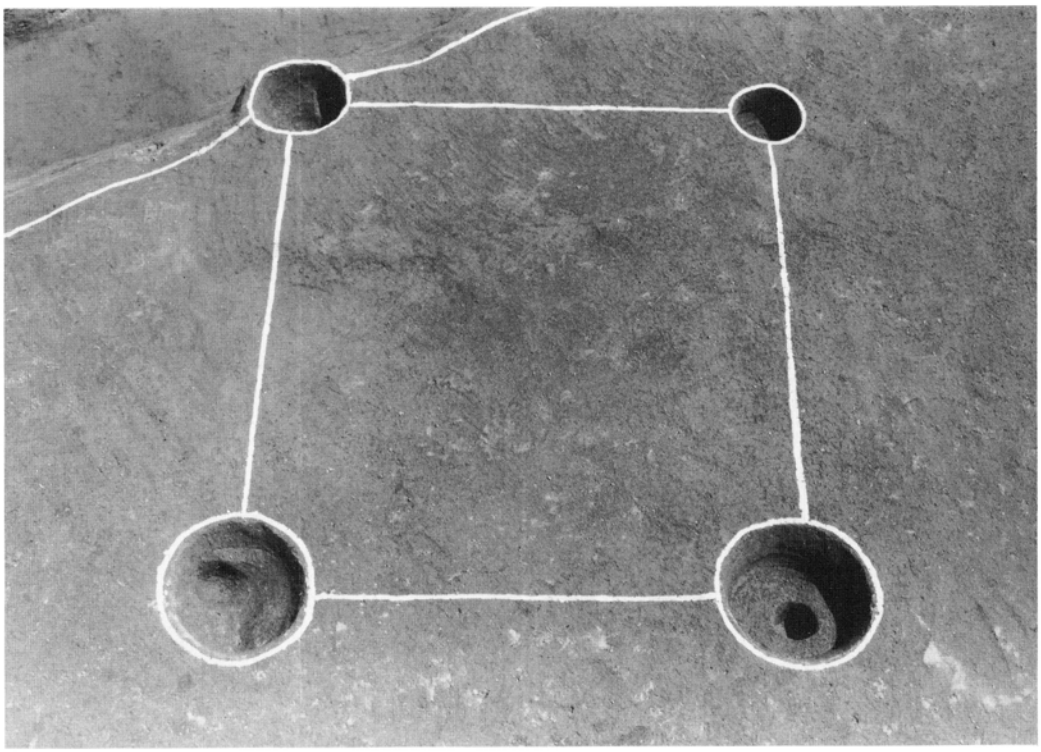
図版 4

(1)　古墳時代上層遺構（北から）



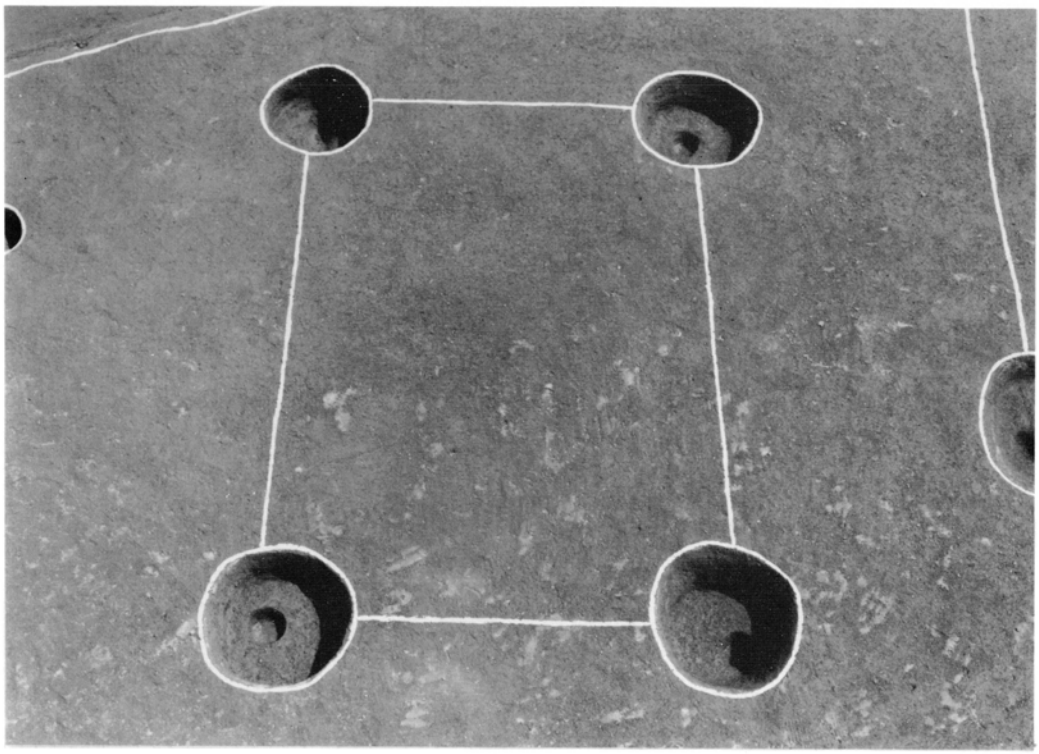
(2)　ＳＡ01・02・03（北から）

(1)　古墳時代中層遺構（北から）

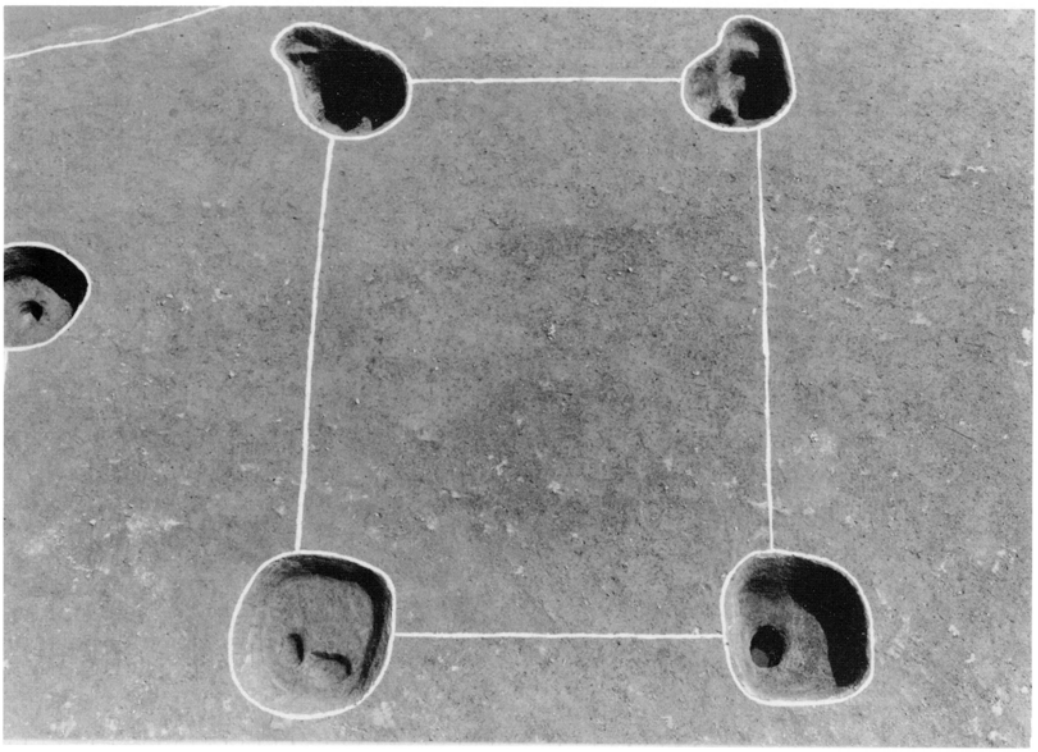


(2)　ＳＢ01（西から）

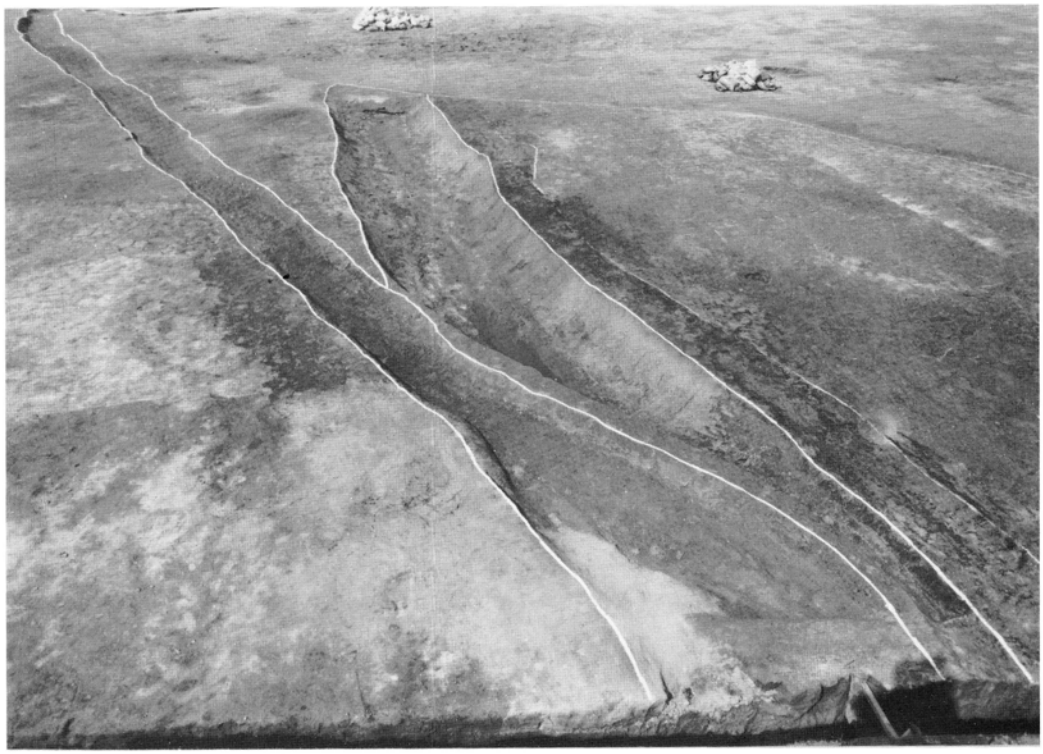
図版 6



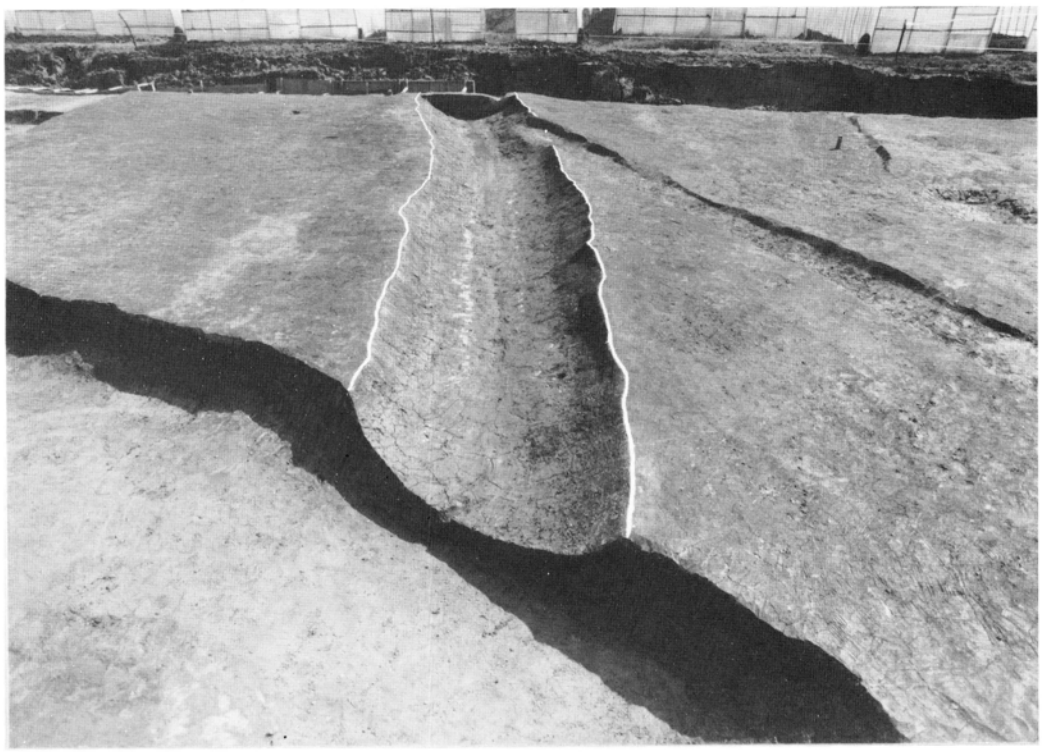
(1)　S B02　（西から）



(2)　S B03（西から）



(1)　ＳＤ22・24（南から）



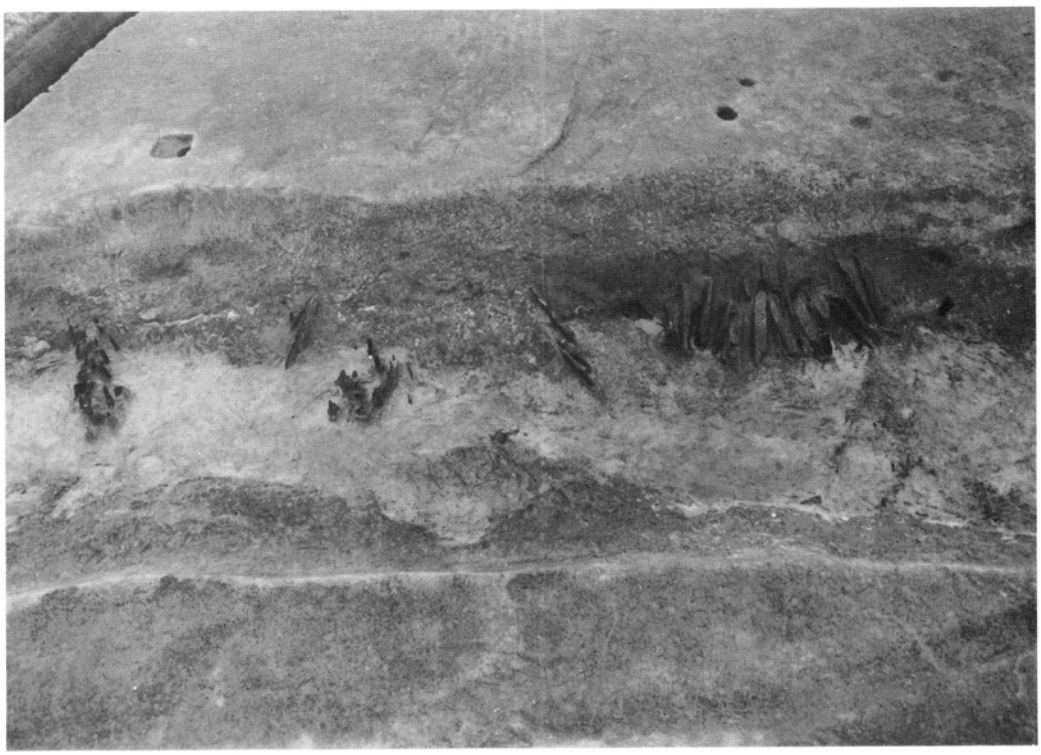
(2)　ＳＤ24（北から）

図版 8

(1)　弥生時代上層遺構（北から）

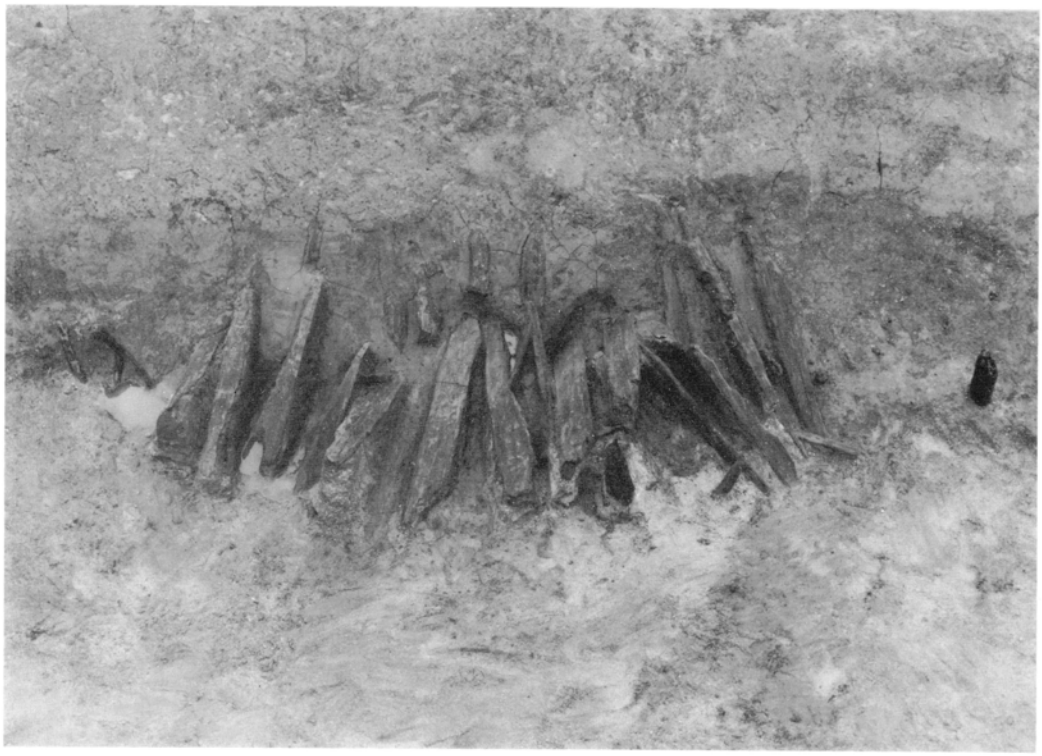
(2)　ＳＤ25（北から）

(1)　ＳＤ25（南から）



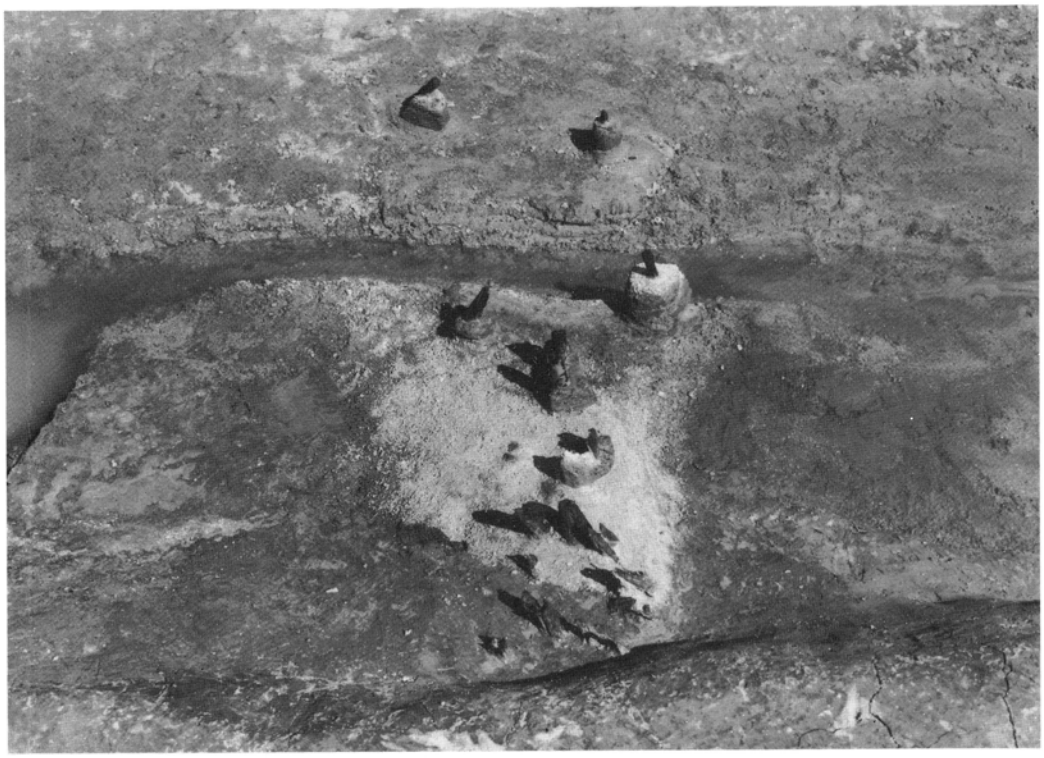
(2)　ＳＤ25南半部（東から）

図版 10



(1)　ＳＤ25第１号矢板列（東から）

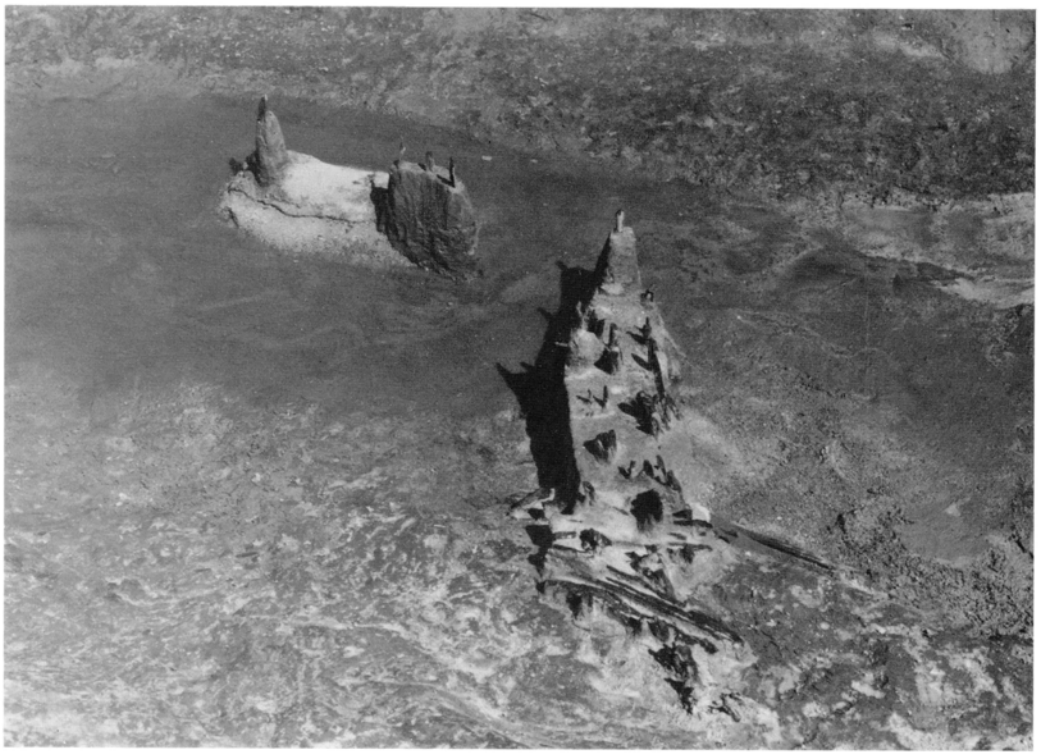
(2)　ＳＤ25第１号矢板列（南から）



(1)　ＳＤ25第１号堰（西から）

(2)　ＳＤ25第１号堰（北から）

図版 12



(1)　ＳＤ25第２号堰（西から）

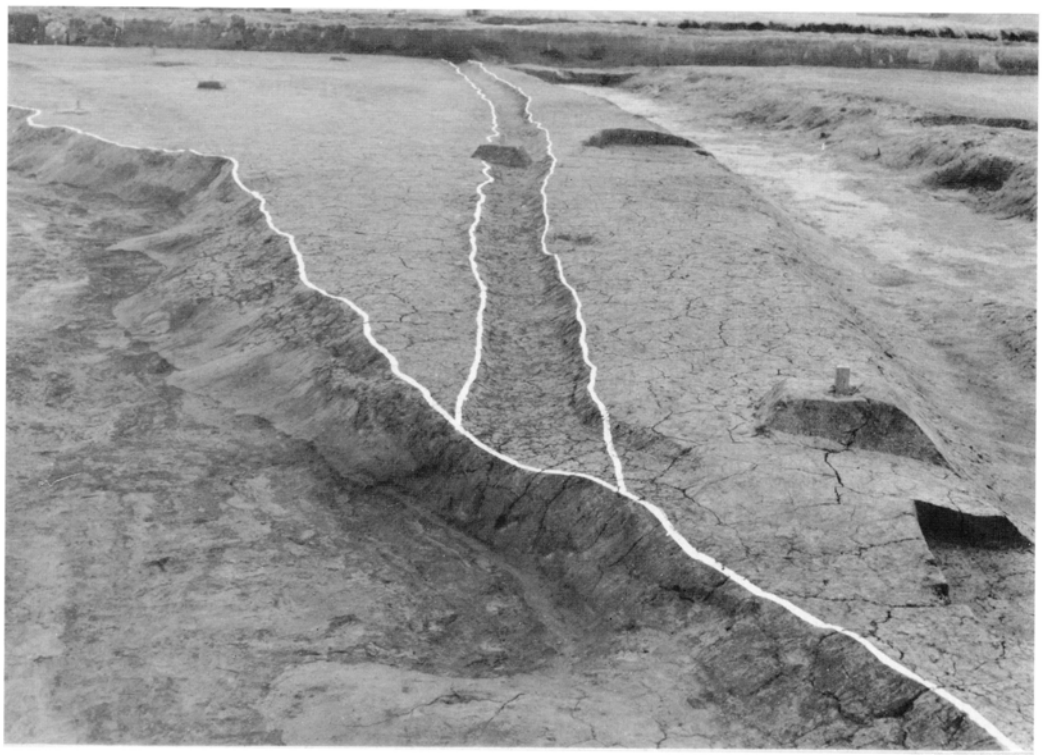
(2)　ＳＤ25第２号堰（南から）

(1)　ＳＤ25第４号堰（西から）

(2)　ＳＤ25第４号堰（南から）

図版 14

(1)　弥生時代下層遺構（南から）

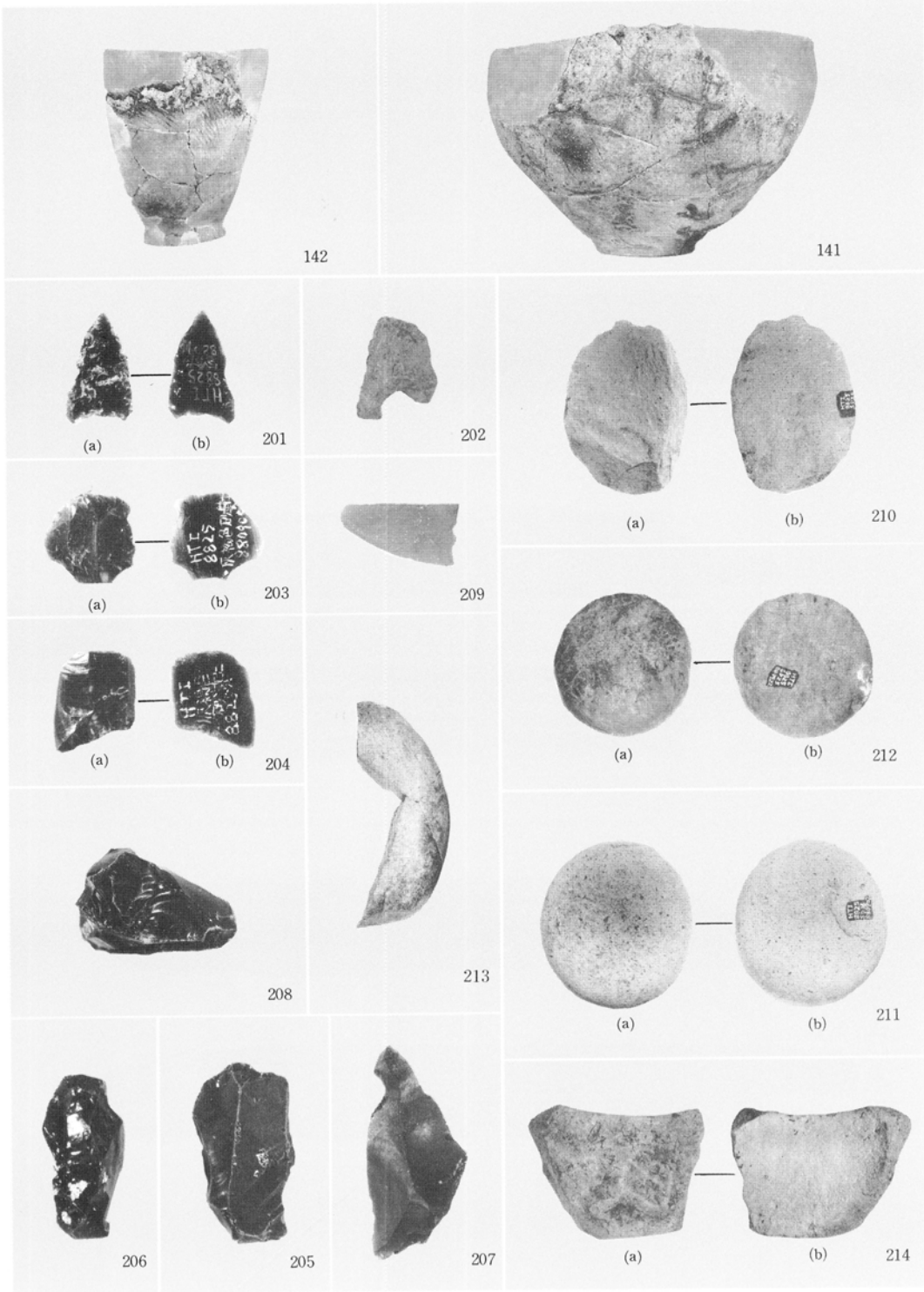


(2)　ＳＤ29（北から）

(1)　弥生時代水田面足跡（南から）

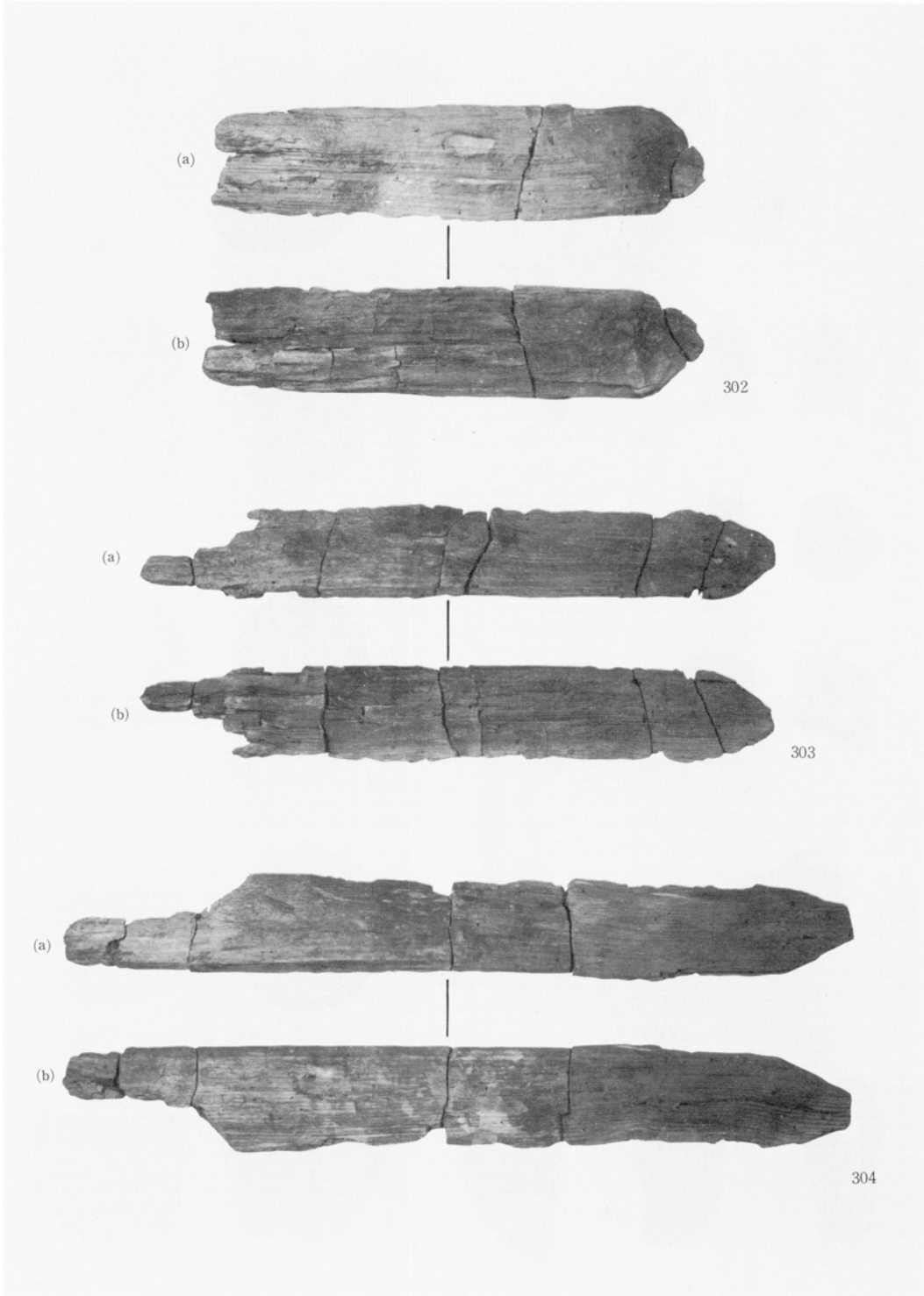
(2)　足跡との比較（右足・女性23cm）

(1)　ＳＤ25・包含層出土遺物



(1)　ＳＤ00・25　出土遺物

図版 18



(1)　ＳＤ25出土矢板

橋本一丁田遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集

1990年（平成２年）３月31日　発行

編集発行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号
印　　刷　博巧印刷株式会社

（表紙題字：結城シズ）